
普通な事を願う彼女と普通じゃない事を願う俺

犬之神

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

普通な事を願う彼女と普通じゃない事を願う俺

【Nコード】

N0521R

【作者名】

犬之神

【あらすじ】

普通な事を願う一人の少女と、普通じゃない事を願う少年。

そんな二人は、普通じゃない出会いをし、互いの為に、ある協力を
する。

そして、二人の世界は変わっていく。

第一話 普通じゃない出会い

どーも。俺、天海堂学園てんかいどうがくえん、2年B組の楽門結らくかどゆうです。ちょっと茶髪な他はあまり誇るべき容姿ではない普通な男の子です。

突然だけど、俺はこの普通すぎる世界に飽き飽きしてます。

あ？中二病なのかだって？黙れ。確かにそうかもしれんが俺がこの世界に飽き飽きしてるのは本当だ。

何故かって？そりゃ、この世界は普通過ぎるからさ。

毎日毎日学校行って勉強して適当な話題で男の友達や女の友達と話したりしてる。

女男関係なく普通に遊んだりもするし、親友もいるしクラスの女子に一回告られたりもした。

ああ、確かに悪くは無い。別に苛められてる訳でも孤立している訳でもない。苛められたり等している子からすればとても羨ましいリア充だろう。……自分で言ってる嫌な奴だなあと思ったわ、今。まあ自重なんてしないが。

だけど、だからこそ飽きる。

最初は楽しくても、それはいつでも起こりえる普通な事だから、何回も繰り返えされていく内にやがてつまらなくなる。

だから、俺は普通じゃない出来事を望んでいる。あ、けど危ないのは勘弁。あくまで楽しい出来事だな。

そう、危ないのは怖いのだ。チキンとかいうなよ？人類皆チキンって誰かが言ってたぞ。……まあ嘘だが。つまなくて悪かったねチクショウが。ま、危ないのはノーサンキューな訳。普通じゃなくて

もな。

それなのによ……

「こんにちわあ楽門結くんだね？私は、ミイスローフⅡSⅡウイリマ。あなたの願いを助けに来たよ♪」
スライナ

何で、俺は今、女の子に剣を首に向けられている訳？

何故こうなったのか。凄まじい速度で思い出していこうとするか。

その日、俺はいつものように学園の門を潜り、教室に入り、いつもの様にクラスの奴に挨拶を軽く交わし、席についた。俺の席は、何列かあるうちの、一番窓際の、一番後ろの席だ。エロゲ主人公的なポジション。

これは俺が必死に教師に希望してこの席にしてもらった。窓際の一
番後ろ、憧れてたんだよね。

ここに座ればエロゲ主人公のような普通じゃないイベントも沢山起こるんじゃないかと期待して。

……まあ何も変わらなかったがな。気分はまあそーい感じになれたが。

「おはよっ結」

そんな感じに物思いに浸りながら中二病みたいに格好つけて外のまだ誰もいないグラウンドを見ていると、右の席から声が聞こえたので、椅子に座りながら右の席を見る。

すると、そこには緑色の髪をしたツインテールのクラスメイトであ

り席が隣でもあり、一年の頃からの親友でもある少女、天野伊那あまのいなが元氣一杯の笑顔で、そこにいた。どうやら今登校してきたようである。

ちなみに予想を裏切るようで申し訳ないが彼女はツインテールだがツインデレじゃない。

ツインテールでツインデレなんてテンプレをぶち壊してるのは中々いいな。……どうでもいいか。

そんで元氣一杯の素直な女の子だ。まあまあ容姿は可愛い。

「ああおはようさん伊那。てかギリギリ登校の俺より遅いなんて初めてじゃないか？」

「いや、あはは。えーとねえ……」

そんな他愛もない普通の質問に、何故か伊那が言葉を濁す。

何だ？目覚ましが鳴らなかったからとかそんなんじゃないだろう？

俺が知る限り、このクラスでいい意味で普通じゃない面白い二人の内の一人だからな。

普通な理由は許さん。

「おはよう、結。その理由は僕が説明してあげるよ」

「おお、俺の嫁。おはよう」

俺と伊那の前に、水色のショートヘアをした一人の美少女が立っていた。

あきせはるか

空瀬春嫁。俺の前の席で、美少女の様な外見をしているが、その本質は男の娘であり、制服も男物だ。

コイツみたいな男なら俺でも、うほっいい男、とか、やらないか？とか言いたくなるな。

いい意味で普通じゃない二人の内のもう一人だ。いや、最初一年の頃知り合ったときはマジ興奮したね。いや、変態的な意味じゃなくて。本人には失礼かもしれないが、男の娘という普通ではない存在にだ。……まあ最近それすらも普通となってしまうつつあるが。

ちなみに嫁って言うのは俺だけがたまに使う春嫁のあだ名。なんかそーいうあだ名をつけると面白そうだしな。

まあ実際にはBL体勢がある女共に騒がれるだけだったが。

「……嫁以前の前に、僕は男なんだけどね。で、伊那が遅れた理由聞いてみたくない？」

「ん、ああ。そっか春嫁は伊那と家が隣だから大体事情も分かっているのか。ああ、聞きたい」

「ちよっ！春嫁あ！言わないでよ！」

俺の嫁、もとい春嫁の口を塞ぐべく伊那が元陸上部仕込の体力と走りを見せるが、万年帰宅部の春嫁はそれをひよいひよいとかわす。

ふっ甘い伊那。春嫁の運動能力が異様に高いのはお前も知っておろう。無駄な足掻きを。

え？なんでこんな偉そうかって？いや、心の中だからね。現実では偉そうにしてる訳でもないし問題ない。

そして、春嫁は伊那の追撃を飄々とかわしながら、俺へと歩み寄ってきて、言う。

「ん、でね。伊那が遅れた理由ってのがね……」

「ふむ」

さて、どんな理由だろうか？

学校が爆発した夢を見てそれで学校がない、とか思ったりとか？それとも空をずーっと見てたら学校忘れてたとか？

普通ならあり得ないが、伊那ならやる。さて、一体どんな理由なのやら。

「学校ってなんだろうなって朝本気で忘れてたらしいよ」

「想像を絶した!？」

「う、うわゝ！ね、寝ぼけてただけだってば！」

そんなくだらなくも平穩な会話などを休み時間の合間などにも何回かする事で、今日の授業は終わり、帰宅部の俺達三人は、帰る準備をする。

「よし。んじゃ帰るかな。春嫁は今日バイト？」

「うん。だから僕は今日急ぐね。それじゃねっ」

そう言って春嫁はダッシュで教室を出て、走っていく。

たしか、喫茶店のバイトだったっけか。

以前俺と伊那で行ったとき女物の仕事の制服を着ていたっけな。店長が店の売り上げの為にさせてるんだとか。ナイス店長って話だな。

「んじゃ、帰るか伊那」

「あ、ごめん。私も今日はちょっと無理かな。陸上部の方に行くから」

「……そっか。んじゃ、またな」

「うん、また明日」

そう言い、軽く駆けて、外へと伊那は軽く走っていく。

(……足、まだ治ってないんだな)

伊那は元々陸上部だった。中々足も速かった。けど、先月の五月十日。運悪く、部活の帰りに自転車と衝突してしまって、神経を少しやられたのだ。それもあって、今は陸上部を退部している。

さっきのは多分、後輩に走りを教えに行ってたんだろう。

足は軽く走るぐらいはできるようになったものの、本気ではまだ走れないらしい。

いつ、治るかも分からないそうだ。

(……なんでこんな事だけが起こるんだかな……。畜生)

そう思いながら、俺は校門を出て、真っ直ぐ進む。

そこは、一本道で、その周りには今は咲いていないが、桜の木がある。

道を歩きながら、俺は思う。

(ほんつとうに普通だらけだよ……。起こるのは面白いどころか最悪な、伊那が怪我をする事。そんな普通なんていらねえよ。ああ、普通じゃない、面白い、素敵なモンが欲しいな……)

そう、願った。

普通だらけのくだらない世界ではなく、普通ではない事だらけの素敵な世界が、欲しい。

そう、願ったのだ。すると。

俺の目の前が、光で覆われた。

その光は、形を成していきこうとし、どんどんと圧縮し、形を変えていく。

「うおっ!?! な、何だ!?!」

俺は驚きながらも、心のどこかで喜んでいた。

その光は、普通ではない素敵な事をくれるような予感がしたからだ。

そして、光は形を成し、人間の身体へと変わっていく。

そしてそれは、女の子。

大人しい、いやおしとやかでいて、マイペースな感じがする俺と同じ年くらいの女の子だった。

そして、その女の子は剣を持っていた。そして、その剣を俺の首に向けて、こう、言ったのだ。

「こんにちわぁ楽門結くんだね? 私は、ミィスローフ^{スライナ} S ヲウイリマ。あなたの願いを助けに来たよ♪」

この普通ではない出会いが、全てを変えるなんて、このとき俺はまだ思ってもいなかったんだ――

第二話 普通じゃない日々の始まる日

「助けに……？叶えに、じゃなくて、か……？」

普通、叶えにじゃないか？そして何で俺は剣を突きつけられているんでしょうか

しかもなんだこの娘？色々と見た目が普通じゃないぞ。

白銀の長髪に、黄色い瞳。そしてどこか幼い様な美少女。そんなだけならまだ普通だ。

けどな、布一枚しか纏っていない上に、右手には剣、だあ？

オイ、これは間違いなく危ない部類の普通じゃない事ですよ。

「そうだね。直接叶える事はできないんだよ。それは能力を得た後の、君の努力次第かな？」

そう言い、白銀の少女はその右手に持っていた剣を、俺の首から、腹に近づけて……ってエエエ！？オイ、まってくれ！死ぬ！しかも……

（声が……出せねえ！？しかも動けねえ！）

そう考えた瞬間、ズドツという音がした。腹を見ると、大量の血が吹き出ている。何故か腹に痛みは感じなかった。しかし、血は出ていた。

（ああ、これは死ぬな……。多分）

結局最後の普通じゃない事ってのは殺人、かよ……。笑えねえなあ

……ホント。

ドサッ

そこで、俺の体は地面に倒れ、意識が途切れていくのを感じた。

「……ん、あ……?」

昼寝から起きた様な感覚で、俺は一本道の地べたで意識を取り戻し、立ち上がる。

あれ?

「俺……死んで、ない?」

おかしいな。まさか夢か?

そう思い、俺は制服をめくりあげ、腹を見る。

すると、へその隣ぐらいいにあったハズの傷が、血こそ出ていた形跡などまるでなく、代わりに丸い円の中に星……そうだな魔術みたいな感じの紋章がタトゥーみたいな感じに付けられていた。

何故か、タトゥーのように、縫い付けられてるわけでもなく、描かれたような感じなのにも関わらず、全く擦っても取れなかった。

「あゝ。起きた?」

「うおおおっ!？」

後ろから声が聞こえ、俺は飛び上がる。

後ろを向くと、そこには俺を殺した(?)銀髪殺人美少女がいやがった。

「お前は何なんだ？そして、俺に何をした？」

「んう。そうだねえ。最初の質問に答えると、私は天界の人間、まあ天使だね。名前はさっきも言ったけど、ミスローフ^{スライナ} S ウィリマ。けど長いからミイでいいよ」

「天使？信じたいけど信じれないな。何か証拠でもねーの？」

普通じゃない事を望んではいるが、この目の前の娘が天使なんて事はそう簡単には認められない。
ただの電波かもしれないし。

「ん。そうだねえ。なら、まず周りを見て気づく事はない？」

「周り？」

その言葉通りに、周りを見ると、いつもどおりの風景で、他には誰もいなかった。

そう。”誰もいなかった”。

普段なら、帰宅部の生徒や、散歩をする老人などがいつも行き交っているのに。

「私がね、この空間を誰も近づけないようにしたんだよ。信じたかな？」

「まだだ。偶々かもしれないだろ。何か決定的な証拠を見せてくれ」

そう。こんな桜が周りに咲いてるだけの一本道だ。

偶々誰もいなかったのもありえる。

「む。本当に下界の少年は証拠だ証拠だってしっこいんだね。なら、これでどう？」

そう言い、銀髪殺人美少女のミイは右手に持った剣を上へ上げ、何

かを眩く。すると。

ドッガアアア！！

音が響き、剣が、否。剣から何か巨大な光のようなものが突き出て、
天空を裂いていた。

うん……。こいつぁ信じるしかなさそうですね。

普通じゃなさすぎて、やべえ、なんか興奮してきちゃった。

「OK。お前が、ミイが普通じゃないってのは分かった。天使つうのも何となく分かるわ」

「ホント？ やったね。じゃ、もう一つの『何をした？』って質問に答えようかな。私はあなたを、一度殺した」

……What？

はい？ なんですって？ 俺を、殺した？

「え……ちよつと待てよ。俺は今生きてるぜ」

「正確には、以前の君、という魂をかな。さっきこの剣、ああ魂解こんかいって言うんだけどね。これで君の腹を刺したでしょ？ これは斬った生物の魂を刈り取る力があってね。今さっきあなたの魂を刈り取ったんだよ」

確かに……痛みや血こそ出ていないが……刺されたような感覚がある。

そして、腹には謎の変なマーク。

……ちよつと格好いいなと思ってしまうのは俺が中二病だからなのか。

「それでさ？ あなたはいつも普通が嫌だって口にも出してたし心の

中でも思ってたよね」

「それがどうし……ってオイコラ。お前俺の心を覗いてたのか。てかそんな事できるのか」

「まあ天使だからね。とまあそんな事はどうでもいいとして、そんな思いを聞いて、私は思ったの」

いや、どうでもよくないからね？ 仮にお前がずっと俺の心を覗いてたでしょう。

そしたらおまえよお、俺の中二的な思いもエロイ思いも全部聞けるって事だろう？

どんな辱めだよそれは。

「あなたの願いを少しだけ叶える助けをしてあげようって」

ミイはとてもいい笑顔で、そう言った。

やばいな。可愛すぎるな。元が元だけに。
しっかし……。

「それが何で俺を殺して生き返らすことに繋がるんだ？ わっけわからないぞ」

「うん、それはね。あなたは普通が嫌いなようだから、私の持っている能力を貸してあげようと思ったはいんだけどね。そういう能力は、人間の弱い魂じゃ使えない。だから、一回魂を刈り取ってその魂の内容を少し変えるために殺したの」

「それってつまり……？」

「うん、そだね。あなたが思ってる通りだと思う。あなたは天使未満、人間以上の魂を持つ、普通じゃない人になったんだよ」

「ほ、本当か！？ じゃあ、このへその付近にあるマークも能力の恩恵か何か！？」

「うん。それはあなたが能力を発動させるために必要なもの。あな

たは人間でもないけど天使でもないからね。儀式的な事が必要になるから。それが儀式のための紋章」

「ほー。スゲーなあ！なあなあ！どんな能力くれたんだ！？」

「……怒らないの？」

「？」

何がだ？いやまあ確かに殺されたのはアレだが結果的に生き返ったし、そこらへんはまあ怒る気にもならない。

なのに、何でそんな申し訳なさそうか顔してんだ？この娘は。

「私……無断で魂の改ざんまでして、あなたを人間という枠から外しちゃったんだよ？普通じゃない事が好きって言っても……限度があるんじゃない？」

ああ、そういう事か。

確かに、無断で人を殺して、生き返らせて、人外にさせてしまったら、天使でも悔やむものか。

確かに普通の人間なら怒るだけじゃ済まないかもしれない。

けど、そんな事はいいのに。だって。俺は。

「別にいいって。そもそも、俺は感謝してんだよ。お前のお陰で普通から脱却できそうな期待にね」

「楽門……くん」

「結でいいぞ、ミィ。で、話の続きだ。どんな能力を俺は使えるようになったんだ？」

「……うん！えっとね……」

その言葉に励まされたのか、ミィの顔が笑顔に染まる。
うむ、やはり女の子は笑顔が超可愛いな。

「結には、まず人間以上天使未満の運動能力や頭脳とかが行使できるようになったよ。あとその他の能力もね」

「へえ。それって全力出せばどんくらいだ？」

「んー。運動能力は、この世界で言うオリンピック金メダリストって人の100倍くらいで、頭脳は普通の人間の20倍くらいかな」

「高っ！？なんだそれハンパネエ。ってかそれでも天使未満とかお前らはどんだけ化け物なんだよ」

天使が何人いるかは知らないが、目の前の天使一人を怒らせたそれだけで一国滅びる程の力なんじゃないかと思ったがマジで洒落になってないので考えるのをやめた。

「それで、結に与えた、天使の能力なんだけどね」

「うむ」

さて、どんなんだろうか？さっきミィが剣で半端ない光を出していたが、あんな事ができるのか？

だとしたらマジでオラワクワクがとまんねーぞ。

「人の本音を曝け出す能力、だよ」

「……………ええ」

何っーか、微妙だ。微妙すぎる。人の本音を曝け出す？いや、確かにすごいんだろうが微妙すぎる。

そんな能力、どこだかの探偵さんとか、コ○ン君にしかあまり意味がないような。

「むっ。馬鹿にしてるね。だって完全な天使じゃないとそんなぐらいしか使えないんだもん。けど使い方をよく考えてみればいいんだよ。それによって君の望みは叶うと思うよ」

「まあ、そうかも、な。んで、能力はどうやって発動するんだ？」
「んとね、まず私からみてあなたのへその左らへんにある紋章に触れて、本音を聞きたい人間の名前を呟くの。そうすると、その名前を呟いた人と話をするよね、相手が本音で喋ってない場合、本音が脳に聞こえて来るんだよ」

「ほ。確かに使いやすいようにっては面白そうだな。まあありがとな」
「凄さが分かったみたいだねっ！どういたしまして」

偉そうに、両手を腰に当ててえっへんとかやってるミィ。

ううむ。可愛いなこれは。しかも布一枚だけだからちよつとした動きで下の素肌があられもなく……コホン。

てか能力とかくれたのはいいけど気になる事がいくつかあるなあ。

「なあミィ」

「？」

「何でお前はこっちの世界に降りて来たんだ？んで何で俺に能力をくれたんだ？」

そう。それが気になる。天使つつうのは普通天界にいれば済むモンじゃないのか？

しかも俺個人に能力を与えるとかわいいのか？

「ああ、それはいい質問だね。まず最初から話すと……私は君と逆なんだよ」

「逆？」

「そう。私は天界での事……。あなたから言うとは普通じゃない事に飽き飽きしちゃったんだよね。それで、いつも私と逆で普通な事に飽きてたあなたを上から見てたの。親近感を感じたなあ最初は」

「へえ。じゃあミィがここに降りてきたのってまさか？」

「そうだよ。私は普通なこっちの世界に憧れて来たんだよ。それと、何となく親近感が沸いた君に能力を上げるためにね」

天使随分適当だなオイ。

飽きたから降りてきましたって。

天使はよほど墮落しているらしいな。

「それでね」

「あ？」

何かミィが期待を込め、不安をも込めた上目遣いの目でこっちを見てくる。

あ？何だ？何を要求するんだ？

「学園つてのにも通ってみたいなって思って。けど、それだと家も必要になるんだよね。だから、その……」

あー成る程そういうことか。

「家に居候でもするか？」

「！いい、いいの？」

俺の一言で、ミィの顔色がパァッと明るくなる。

天使ってよりマジ人間っぽいな、反応が。

「ああ。家なら親父も母さんも許してくれるだろうし」

「ほ、ホントにいいの！？」

「ははっ、しつこいな。いいって言ってるんだろ」

問題は、愛すべき我が妹が許してくれるかどうか、だが……。

まあ、何とかなる、いや、何とかなるはず……何とかなったらいね？

「よし、んじゃ行くぞミィ」

「うんっ」

ピョンピョンと飛び跳ねながら楽しそうに歩くミィを見て、俺は微笑する。

そいや、いつの間にか周りに人が見え始めたな。
何時の間に解除したんだろうか。

（にしても、天使か）

一日でかなり普通じゃない事ばかりが起こったな。
これから、ミィと一緒にいればもっと普通じゃない事は起こるのだろうか？

「ははっ」

俺は、そんな日々を想像して、笑った。

久しぶりに、楽しくなってきた日常を想像して。

第三話 普通じゃない妹と、普通じゃない展開の予感

「ここがあなたの、結の家？ 普通な一軒家だねっ」

墮落天使のミイが二階建ての庭付きマイホームを見ながらはしゃいだ様に言う。

「それは貶してるのか？」

「ううんっ。普通でいいなーって純粹に思ったの」

「そか。……ハア」

「？ そういえばさっきから結はなんで疲れてるの？」

「オマエのせいだろうがよ」

「？」

？ じゃねーよ。

オマエがまともな服きてねーで布一枚っーどこかで見たようなキヤラみてえなのを着てるから悪いんだろが。

あんな服装だったら一発通報余裕だからな。

まあ通ってきた商店街は気のいい融通の利く人たちばかりだから何とか回避できたが。

それにしたって商店街を抜けてからの住宅街での通る人からの視線は冷たかったぞ？

ああ、女の子をあんな格好にしてるなんて、なんて男ぐらいな視線だったからな。

住宅街でよく通報されなかったモンだ。

てか天使ならさっきの人払いずつとやってろよコノヤロウ。

……まあ服の問題点に商店街まで全く気づかなかった俺も俺だからあまり強くは言えないけどね。

まあ、その問題は家まで無事たどり着けた事で解決したからいいけ

どな。
だが。

「次なる問題が待ち構えてるけどな……」
「？」

独り言によく分からないといった顔になり首を傾げるミィ。
海外で仕事をしている親には許可は携帯で貰った。それは問題ない。
ケド……。

まあ、入ればすぐに分かるさ……。嫌でもな。

「んじゃ、入るかね」
「うん」

そう言い、俺は持っていた鍵でドアを開ける。そして。

「ただいま————」
「お帰りなさい兄さんっ♪寂しかったですよー！ご飯にしますか？
お風呂にしますか？やっぱりにしますよね？ああっ、兄さん好き
好き好き好き大好きです♪兄としても異性としても大大大大大大
大好きです！！！」

ただいまをいい終わった直後に、いきなり家の中から茶髪のサイド
ポニーが特徴的な我が実の妹で中学三年の、楽門陽らくかど しょうが俺に抱きつい
てくる。

俺はそれを拒むことなく受け入れ抱きしめ返す。

……これを拒むとコイツは後が怖いからな。

「ああ、俺も寂しかったぞ陽。そして好きだ。妹としてな。んで、
離れてくれないか陽？あんまり抱きつかれると興奮して死んじゃう」

「はいっ♪死ぬほど寂しいけど離れますね。死んでしまっは私の生きる意味がなくなってしまうすし。……でも、私でも興奮してくれるんですね、嬉しい……♪」

そう言うと、頬を赤くしながら少し残念そうに、それでいて嬉しそうな顔をしながら離れる。

勿論本気ではなくて、陽を離すための嘘っぱちだけだな。

……にしてもコイツはいつになったら兄離れするのだろうか。歳が増すに連れて溺愛度が高くなっている気がする。

辛うじて今は溺愛以上ヤンデレ未満だが。いや、辛うじてませんなそれ。後少して覚醒ですよ。

「えーっと……」

そんなブツ壊れた妹を見て、ミイは気まずげに視線を漂わせている。

「……兄さん、その女は誰ひとですか？」

ようやくミイに気づいたのか、陽が聞いてくる。

おい、怖いよ。口元が笑ってるのに目が全く笑ってないよ。

いっつも見知らぬ女と初対面の時のこの反応だけはマジで普通の奴の嫉妬とは一線を越えてるな。

伊那と最初会わせた時もこんな感じだったっけか。

「ああ、コイツはなんつーかここに今日から居候するってか、してもらう予定の娘なんだけど……ダメかな？」

「ミ、ミイスローフスライナⅡSⅡウィリマです」

俺が頼んだ後、おどおどと緊張しながらミイは挨拶をする。

天使が緊張とか情けないなあ。

……俺も緊張してるケドな。溺愛以上ヤンデレ未満な陽が、そう簡単にそんな事許すわけが……。

「いいですよっ☆」

「……え？」

その答えに、思わず俺は面食らってしまい、腑抜けた声を出してしまふ。

いや、でも、え、マジで？

あの、他の女子と少しでも仲良くしてたら、嫉妬を半端なく出す陽が？

「むう。何か可笑しいですか？」

「いや、あの、俺が連れてきておいて何だが、女だぞ？ しかも居候ですよ？普通に考えて」

「私が許すはずがないっですか？。失礼ですねー♪ 確かに私としても半端ない嫉妬心があるのは認めます。もおミィさんをぐっちゃぐちゃにしたいくらい♪」

「ひっ!？」

……洒落になってねーですよ我が妹よ。

もうその天使が泣きそうになってますよ。

「じゃあ何で……？」

「ふー。全く、常識的に考えてくださいよ兄さん♪居候させて欲しいって事は、なんか訳ありなんでしょう？」

「あ、ああ」

まさか陽に常識的に考えろと言われるとは……。

つか、訳ありってレベルじゃないけどね。ただ、天界に飽きて下りてきたってだけの家出天使ってだけだからね。

「なら、普通は助けますよ。ちよいと臭いですが、困ってる人に手を差し伸べるのは当然です♪それに、兄さんがそうしたいんでしょ？　なら、私はミイさんを明るく迎え入れるだけですっ☆」

「！」

あー……そうだったよ。何考えてんだか俺は。

こんな素敵な事を言えるから陽は、溺愛以上ヤンデレ未満なんだろうが。

陽は、確かに俺を溺愛している。病的なまでにとってもイイほどにな。

けど、よくエロゲで見るような破綻して全てを壊してしまうような溺愛、即ちヤンデレではない。

俺の為に全てを尽くして、俺を絶対に幸せにしようとする溺愛だ。

その為には、俺が幸せになる事は絶対にして、俺が不幸せになるような事は、絶対しない。例え陽が幸せになれなくても。

今は、ミイが家に居候する事が俺の幸せ……は言いすぎかもしれないがそーゆう事だ。

陽にとっては少なからずとも嫉妬はあるのだろう。けど、陽は俺が幸せになるために、ミイを受け入れた。

そして、陽は基本的には優しい。誰にでも分け隔てなく接する。

……ミイに手を差し伸べたいというのは本心だろう。

ったく……俺には本当もったいない妹だ。

「あ、ありがとうっ！　邪魔になるかもしれないけど、居候させてもらいます！」

「いえいえ☆邪魔だ何てそんな。それと、敬語じゃなくていいですよ。私の方が歳は下みたいですし♪」

「え、あ、うん！　よろしくするね、陽ちゃん」
「こちらこそ♪」

二人は握手を交わす。
それを見て、俺はほっとする。

（とりあえず、今日の問題は全部片付いたか。もう疲れたし……。寝るかな）

そう考え、俺は二回の自分の部屋へと上がるべく階段を上り、部屋へと戻り、ベッドに一直線で突っ込む。

「は〜……」

いやあ、疲れた、普通じゃない事ってのは楽しいがやっぱその分疲れな。

もう、寝よう寝よう。

おやすみさな〜い。

そこは、天界と呼ばれる場所。

といっても人間界と大差はなく、あるのはただ広々とした街。

差があるといえば、全てが雲で作られ、全てが白で覆われている事だろうか。

そんな白一面の世界のある場所に、城のような形状をした雲がある。その中で、一人の白髪の女は、雲で出来た椅子に座っていた。

その姿は凛々しく、優しく、人間の想像通りの天界の住人とも言える様な風貌だった。

ミイと同じような白い布を纏っている上に、胸が大きく、その姿は色気に満ち溢れてもいた。

女の周りは静寂に包まれていた。

「メニサフオートⅡFⅡアスニマ様！」

そんな静寂を打ち破るかのように、城に同じように白髪まへの青年が声を少し荒げながら現れる。

メニサと呼ばれた女と違い、性別間の違いでもあるのか、纏まとっている布は、胸から下まで巻かれている女とは違い、下半身以外には巻かれていなかった。

メニサと呼ばれた女は、優しく、凛々しい表情で目をやり、口を開く。

「ミイスロフさんの居場所は分かりましたか？クエサさん」

「ダメです……。痕跡が何一つ残っていません。下界を見下ろして探そうにも、あの能力はあの方にしか使えません」

「そうですか……。困りましたね」

「ただ、一つ朗報があります」

「何でしょう？」

クエサと呼ばれた青年は、一言、よく分からない言葉、人間が聞いたら、k u b x あ i r b x す i a ウせ、と聞こえる様な事を言う。すると、青年の前に、一つの光が現れる。その光の中には、一人の男の姿が写っていた。

ギザギサな茶髪をした男、楽門結の姿が。

「この方は？」

「楽門結という、人間の方なのですが……。どうもミスローフ様と仲良くしていた天使の、スフィカ^{ヴェリカ}ⅡVⅡサンセットさんの話だと、暇があれば、下界を見下ろしてこの方の生活を見ていたようです」

「という事は、その方に何かヒントがあるかも知れませんね」

「はい。どうなさいますようか？」

「決まってるじゃないですか」

メニサは、優しい笑みをさらに昇華させた様な笑みを寄せ、一言。

「行ってみましょう。下界に。うふふ、下界に降りるのは何億年振りでしょうか」

「メ、メニサ様が直接！？い、いけません！　メニサ様までもががなくなってしまうれたら……！」

「ああ、確かにそうですね。残念ですね。でも、ならばどうするのでしょうか？　ミスローフさんの搜索はあまり公には出来ないのですよ？」

「スフィカさんを降ろしましょう。彼女なら、事情は知っていますし、ミスローフ様の行動を予測出来るかもしれません。一人とはいえ多少、降ろすのに時間は掛かりそうですが」

「その手がありましたねえ。ああ、私も下界へ降りたいものです」

「冗談になりません。さあ、行きましょう。スフィカさんに話をし、降界^{こうかい}の準備を進めないといけません」

「ふう。分かりました。じゃあ行きましょうか」

そうメニサが言った瞬間、二人の姿は消える。

結の写った光を残して――

第四話 普通な日々

「腹あ減った……」

目覚めた俺の第一声はそれだった。

ベットにおあむけになりながら、近くにある目覚まし時計を取る。

「……23時12分」

何つーことだ。どんだけ寝てんだ俺。しかも……。
ぐう。

「そおだよ……帰って即寝たから飯も食ってねーし風呂も入ってねえよ……」

作ってもらうにも、陽は多分もう寝てるだろうな。

作り置きかなんかしてくれてるかな？

しかし何で起こしてくれなかったんだろう？ いや、寝てた俺が悪いのはそうだけどき。

そんなコトを考えながら、俺は一回のリビングへと向かうため、自室を出る。

部屋を出た正面の陽の部屋を見ると、明かりがついていない。

……もう寝ちゃったか。

それを確認して、俺は階段を使って下に降り、リビングへと向かう。電気をつけ、いつも飯を食べるテーブルを見ると、チャーハンがサララップに包まれて置いてあった。とてもうまいものである。ごきゆり。

「っと、冷めちまってるだろうからちゃんとおっためないと……
ん？」

俺はサランラップを外して、異変に気づく。

ありゃ？冷めてないどころか、湯気が立ってるほどに暖かいみたい
だぞ？

何でだ？

「ん？」

そう不思議がっていると、よく見たらチャーハンのすぐ横に、一枚の
メモがあるのに気づき、手にとって見る。

陽が書いたものらしく、女の子らしい可愛い字で書かれていた。

俺は、文章を読み始める。

『おはようございます兄さん♪兄さんの事が好きでしようがない妹、
陽です☆ 最初に、起こしてあげないですみませんでした、兄さん。
寝顔がとても格好良くて、起こす気にはなれませんでした。それに、
何でかは知りませんが、相当お疲れのようだったので睡眠を邪魔し
てはいけないと思ったんです。もしかして疲れはミイさんが原因な
んですか？ 困ってたらいつでも言うてくださいね♪いつでもミイ
さんをぐちゃぐちゃに――』

ぐしゃりっ！

さーて、さっさと食べるかなー。

俺は、冷や汗を描きながら握りつぶした手紙をにゴミ箱にぶん投げ
て、席につき、チャーハンを食べる事にする。

スプーンを持つと、手が震えてる事に気づく。

だって、怖いんですもの……。必ずや、ってところから文章がなんか

殴り書きになってきてて、怖いんですもの……。女の子の可愛らしい字から鬼の書いた字みたいになってるんですもの……。いや、鬼の字なんて知りませんがな。

「さ、さーって食べるかなーっと。いただきます……。ん？」

何だ？チャーハンの皿の下に何かが……。

それは、陽が書いた、二枚目のメモだった。

そして、最初の一文を見た瞬間、俺はわずかに口に頬張っていたチャーハンを吹き出した。

『兄さんは、きっとミィさんをぐちゃぐちゃに、のところから一枚目の手紙を捨てるだろうと予想できたので二枚目を書いてみました』

「エスパー!？」

流石溺愛以上ヤンデレ未満の称号を持つ妹、陽！恐ろしい娘！

俺はそう怯えながらも文章を読み進めていく。

『兄さんの事ならなんでもわかります♪ その証拠に、チャーハンも兄さんが起きる時間、23時12分を完璧に予想して、兄さんの分は美味しく思える時間に作りました！なのでほかほかで出来立てです♪ よく味わって食べてくださいね♪ 兄さんの妹であり下僕の陽より♪』

「……………」

だから出来立て状態だったのかよ！嬉しいけど怖えよ！ どんだけ俺を理解してんの！？ 俺でも起きる時間なんて分かんなかったのになんで分かってんの！？ ……ちなみに最後の文章は見ないことにした。なんか、もうヤンデレ未満じゃなくなってる気がしたか

らである。

「はぁ……」

もういいや。作ってくれたんだから妙なツツコミをいれんのはよそう。

食べるか……。

「うめえ……」

チャーハンを平らげた俺は、満足そうに、そう呟く。恐らく、鏡を見たら物凄いキモイ顔をしている事だろう。いや、キモグロイでもいいかもしれない。

相変わらず人としては破綻して行くせに、何でもこなす奴だなあ……。俺も料理は作れるが陽の料理はそこのレストランなんざより数倍以上の旨さがある。思わず顔がくずれてしまうほどだ。

「ん？」

そうして満足した俺は食器を片付けて、部屋に戻ろうとした所で、リビングの、庭が見える窓の先、庭で人影を見つける。

それは、今日出会った何から何まで普通じゃない少女……。そして俺とは逆に普通を欲している天使のミスローフ^{スライナ}ⅡSⅡウイリマだった。何をしているのか、庭でつつ立って、空を眺めている。

「ずっとあそこにいたのか？影薄いな……。天使のくせに」

さっきまでリビングでチャーハン食ってたから目にはつきそうなモンだけど……。

まあ俺が気づかなかったダケかもしれないが。

「何してんだ？ 墮落天使」

「え？」

俺が、庭が見える窓を勢い欲く空けて庭に出て、近づいてちよつとした軽口も混ぜて声をかけると、ミイは少し驚いたようにこちらを振り向く。

「あ、今食べ終わったところなのかな？ ……とゆうか、墮落天使って……。この世界で言うところ……喧嘩を売ってる？」

「おうおう売ってるぜ、かかってこいや！ この人間を超えた存在、楽門結様に勝てるならな！」

俺は奇妙なジェスチャーをとりながら、テンション高めに言う。
丁度、人間以上の俺の力を見てみたいとも思ってたしな！ うっへへ。

そんな俺を見て、少しミイは笑い、

「我が身ニ危害ヲ加エヨウトスル物ヲ悪魔ト見ナシ裁キノ光ヲ今ココニ――――」

「すいませんでした」

変な呪文のようなものを言うミイに応じて、ミイの周辺に爆発しそうな光が発生しかけてきたので、俺は残像が見える速度で土下座をする。

……そういやコイツは俺以上の怪物だった事を忘れてたぜ。

「ふふ。あなたと私じゃ喧嘩にすらならないから懸命な判断だよ」

そして、俺の土下座を見れたのが嬉しかったのかわずかに得意げな顔を見せ、ミィは言う。

畜生！悔しい！天使ってのが男だったらまだ悔しさが半減したのに、女に負けるとか悔しすぎるわ！

俺は悔しさのあまり土下座の体勢のまま拳をガンガンと地面を叩く。
……っとうそじゃなかった。

「で？どうしたんだ？空なんかずっと見てたみたいだけだよ。 ……
…なんか、表情が悪かったからよ」

俺は立ち上がって、ミィに問いかける。

すると、ミィは一瞬びっくりしたような顔を見ると、少し笑顔になり、言った。

「ちょっと天界の事を考えててね。 ……あはは、心配してくれてるのかな？」

「ああ？ち、ちげえよ。た、ただんな辛気臭え顔されてたらこっちもやっとオマエのお陰で楽しくなってきたそうなのになんかテンション下がるからな」

……べ、別に、つ、ツンデレなんかじゃないんだからね！！

……いかん、ツンデレ口調でツンデレ否定しても説得力ないですね。ちなみに、大体今までの脳内発言から分かると思うが俺は隠れオタクです。エロゲもやってます。ハイ。

俺の言葉に反応し、ミィが少し嬉しそうな顔をする。

……やめろい、なんか照れるぞこら。

そして、話し始める。

「……あのね、私、天界の皆に許可をとらずに下界こっちに来たんだよ」
「まあだとは思ってたさ。普通に考えて天使サマが軽々こっちに来

ていいハズないしな。何だ？今更こっち来たの後悔してんのか？」
「……うん」

とミイは哀しそうな顔で言う。

「親友の天使に……何も言わないで来ちゃったのがね……」

「親友？女の娘か？」

「うん。スフィカⅡVⅡサンセットって娘なんだけどね。実は、彼女とも一緒にこっちに来る予定だったんだ」

「約束してたのか？」

「ううん。私が連れて行こうと思ってただけ。あの娘は私と同じ理由で下界こっちに来たがってたんだ。だから、私が天界を出る際、あの娘にいきなり言って驚かして、下界こっちに連れてきて喜ばそうというサプライズをしようと思ってたんだ……。けど」

「けど？」

そこで、ミイは少し苦笑しながら言った。

「出て行こうと思ってスフィカの天場フィールド、こっちの言葉で言うなら、家かな。そこに行行ったんだけど、運悪く家にいなくてね。それと一緒に行けなかったんだ」

「探したらよかったじゃねーか」

「無理なんだよね、それが。下界に降りる為の術……、墮落ダウンって言っただけだね。この術は発動までに三日間かかって、しかも発動して、こっちの時間で言う約一分くらいで消えちゃうんだ。だから、探してる暇がなかったんだよ。……とは言っても……言い訳だけだね。本当ならまた日を改めて術を発動させてスフィカと一緒に行けばよかった。けど、我慢できなくて下界こっちに来た……。我儘だからね、私は」

「……それを、後悔してんのか」

「うん。多分、スフィカも今、私を恨んでると思う。いつもいつも

一緒にいつか下界に行こうねって行ってたのに私だけ行っちゃうんだもん。……恨まれても仕方ない、よね——って、わわっ？何、なんで頭撫で、って痛い痛い！乱暴に撫でないでえ」

「うっせ。まったく……オマエはバカか？」

「……え？」

少し驚いた様な顔をしたミイに、俺ははっきりと告げる。

「まったく……。確かに、オマエは少し悪い事をしたかもしれないねえ。けどよ、俺をいきなり殺していきなり人外に転生させた程の奴がそんな事で悩むんじゃないよ」

「け、けど……」

「けど、じゃねえ。それにな、恨まれてるなんてのはオマエのただの思い込みだろ？それとも、オマエとスフィカって娘の仲はその程度なのかよ？」

「そんなわけないっ……！」

ミイは、小さい声ながらも、はっきりと、きっぱりとした声で言った。

「……まったく、わかってんじゃないかよ。」

手間あ掛けさせんなよな、天使様。

「だろ？だから、オマエは堂々としてりゃいいんだ。堂々と、オマエが望んだ普通な事をいっぱいして楽しんでりゃいいんだ。」

それで、暇が出来たらそのスフィカって娘をこっちに連れてきて、思う存分楽しめばいいじゃねえか。それでいいじゃねえか。だから、悩む事なんてない」

「結……」

俺の言葉に、ミイは呆然としたような表情になり、俺を見つめる。

……だあーっクソ。何オレは言ってるんだ？ 相当ハズイ事言ってるじゃねえか。

畜生、顔が熱いっ！
だーっ！

そう心の中で発狂していると、ミイが優しく微笑み、言った。

「うん、そうだね……。ありがとう、結」

「……どういたしまして」

その笑顔一つで、俺の心の中の発狂は鳴り止む。

それと同時に、ミイが悩みから解放されたような笑みを見て、俺は彼女の役に立つことが出来たのかな、と思った。

その夜は、なんだかすごく寝心地が良かった気がした。

「兄さーん♪ 朝ですよー♪ 起きてください☆」
「ん、んん……」

……うむむ、陽の声が聞こえる……。もう、朝なのか。早いなあ……。結局昨日はミイとの話も長引いたのもあって12時以降に寝た。なので、眠いです。半端なく、眠いです。

学校……休みたいなあ。休むか？

俺は、ベッドに仰向けになりながら、陽の姿を探す。……というか、俺のベッドに潜り込んでやがりました。もう、ここはツツコミません、はい。

そんな陽を少しうんざりしたような目で俺は見てから、言う。

「陽……おはよう。俺、実は昨日から全身が麻痺して動かなくてな、だから学校を今日は休みたいんだが――」

「！体が動かない！？　なら……兄さんを思う存分食べ放題――」

「いよーっし！　イイねえ！　イイねえ！　最高にいい天気だ！　こんな日は学園に行くっきゃないよな――！」

そう言い、俺はベッドから立ち、窓の外で光る太陽を見て、爆発的な速さで一階へと走る。

いやいやあ、陽は俺を起こすのが上手いなあ。あんな冗談言われたら、起きるしかないじゃないか。

うんうん、愉快的冗談だ。何かハアハア言ってたけど、あれも冗談だよな！　うん、絶対そうだ！

そんな事を考えながら、俺は一階に降り、リビングの、テーブルに座る。やがて、ミイと陽が二階から降りてくる。ミイは眠そうでまだパジャマで眠そうにふらふらしながら、俺の正面の椅子に座り、ぐでー、っと体をその綺麗な白銀の髪とともに、机に預ける。……だらしねー。

陽は未だに何かハアハアしてたが、すぐに朝食の準備に取り掛かるべく、キッチンへと赴く。

あ、ちなみに今は全く関係ないがミイの部屋は俺の部屋の隣の空き部屋だ。天使の能力を使って、生活に必要な物を生み出して、結構な普通の部屋になった。服も、パジャマもそれで作っただらしい。っと、んな事ともかく、ミイにおはよう言っていないな。

俺は、ミイにおはようをする。

「おはよーミイ」

「んにゅ、にゅ……にゅ……おはようーゆー……。……むにゅー」
「……」

俺の挨拶に、まだやはり眠いらしく、とてもふにやふにやした感じで応じるミイを見て、俺は全身をくねらせる。

……か、可愛ええええええええええ！ふつにやふにやだよ、ヤベエよ、オイ！何この可愛さ！

この可愛さだけはマジで天使だわ！ やべ、コレは食べてしまった
い——

ズドツ！

「……わあ、兄さん、お見事です♪　ぱちぱちぱちー♪」

はい、なんかフォークが二本ほど飛んできました。しかも、俺の眼球目掛けて。

投げたのは言うまでもないが、言っておくと、恐ろしきマイシスタ
ーです。なんか今笑ってます。あ、でも目は笑ってません、超怖い
です。口だけ笑ってて拍手とか、超怖いんです。

ふにやふにやしてたミイも今ので飛び起きました。

ちなみに、ズドツという音は俺に刺さった音じゃないのでご安心を。普通に、飛んできたフォークを右手の指の隙間で受け止めたのだ。

……まさか、こんなトコでミィから貰った力を使うことになるとは
ついでに、もう一つの能力も使うかな。こんな、くだらねえところ
で使うなんて、泣けてくるぜ！

俺は、腹に刻まれている紋章に、手を触れ、言う。

「樂門陽」

名前を、口に出した瞬間、身体全体に何かが走るような感覚がした。なんだこれ、超気持ちいい！！

それは、やがて治まり、いつもの普通な状態へと戻る。

そしてそのフルネームを呼んだ意味がわからなかったのか、陽は、
？ という表情をする。

しかし、そんなのは気にせず、俺は続ける。あ、なんか怖かったの
で敬語で続けました、はい。

「ええと、貴方様は何故にこの俺にフォークを投げたのでしょうか
？」

「あは☆ すみません、兄さん。手を滑らしてしまって……♪」

ほほう、手を滑らしてキッチンから正確に俺の眼球を狙えるとは、
どこぞのスナイパーだオマエは、と言いたかったが言いません。俺
はここまでブツ飛んでる妹にそんな口を叩ける度胸はあらんのです
よ。

と、そんな事を考えていると、いきなり頭に何かのノイズが聞こえ
たと思ったら、音声が脳に響くようにして聞こえてくる。
これが、ミィの言ってた本音ってやつか？

【本当の理由は、ミィさんを兄さんの目に写らせない様にするため
なんですけどね……♪ だって、目がだらしなかったんですもん。
ああ、ミィさん羨ましいなあ、兄さんに凝視してもらえて。恨めし
いなあ♪】

「……………」

聴いてはいけないものを、聴いてしまいました。

「はあ……………」

その日の学園の教室の席で、俺は深くため息をつく。原因は簡単。陽の朝の、アレである。

いや、お兄ちゃん大好きなのはいいんですが……もうヤンデレになっってしまったような気がして怖いんですよ。ほら、ヤンデレENDって9割がBADENDじゃないですか。怖いんですよ、ホンキで。

……溺愛以上ヤンデレ未満と言う称号がレベルアップしないことを切に願うよ。

つーか今、家にミィ置きっぱなし（物扱い）だけど大丈夫かなあ……。学園には今日は編入いきなりはできないらしいから家に置いたきたけど……。

「さつきからすごいため息ばかりして昼ご飯食べてないねー結。何かあったの？」

そんな風のため息ばかり吐いてると、伊那が隣から声をかけて来る。ちなみに、おにぎり食いながら。しかもボロボロこぼしてんぞ。気づいてないみたいだが。

行儀悪いな。俺の嫁、春嫁を見習え。黙々と、静かに綺麗に食べてるぞ。

今は昼休みで、昼飯を食べるときは、俺の席に隣の席の伊那と前の席の春嫁が机をくっつけて食べるのだ。

俺は、あまり食べていない。自分の弁当、陽の作ってくれた弁当を少しずつついでながら、伊那の質問に答える。……ちなみに、白米のところに大好きです兄さん（はあと）とかかいてあるのが超恥ずかしい。

「ヒント、弁当」

「あっははは……。陽ちゃんかあ……」

「正解。いや、お兄ちゃん大好きなのは喜ばしいんだが、流石にコレはちよいとキツイなと」

そう伊那と話していると、春嫁が話に入ってくる。

つか、もう食ったのか早いな。まだ昼休み5分しか立ってないっつーのに。

「いいじゃないか。妹からそんなに愛されてるなんて。しかも、可愛いしね陽ちゃん。充実してるよねえ結は。はあ……」

「春嫁さん？何か言いたいことがありそうですか？」

「死ねばいいのにー」

「ストリートにありがとう！！　つか何で！？　何で俺、死ねって言われた！？」

「陽ちゃんからの愛が羨ましいんだよ。妬ましいんだよ。死ねばいいのにー」

「二回も言うな！」

まったく、春嫁はたまに毒舌になるから困る。

つか、コイツに罵倒されると女の子に罵倒されてるみたいで泣きそうになって来るんだよね……。

「ま、まあまあ陽ちゃんはいつもの事だとして、なーんか今日はいつも以上にため息をしてるなあって思ってたさ。何かあったの？」

「いや、それは……」

いつもの事で。まあそれよりも、ため息の原因は確かに陽だけの事じゃないんだよなあ。

ミイが俺に授けてくれた能力、人の本音を聞きだす能力……『心覗き』とでもつけとくか。

……ネーミングがそのままなのは、俺がつけると中二なセンスで恥

ずかしいからなのは内緒だ。

まあ、なんだかんだでため息の原因は、この能力にもあるのだ。なにせ……。

「こんなんで、どうやって普通から脱却すりゃいいんだか」

「？」

伊那と春嫁が突然呟いた俺に、？という表情になるが、俺は軽く、気にするな、と言った。

そう、俺はこの普通すぎる日常から逃れたい。退屈から。けど、この能力で、どおやって脱却しろつつうんだ？ ……まあいいか。使っていきや、何となくその糸口が見えるかも知れねえ。

とりあえず、伊那にでも使ってみるかな？ ……気になる事もあるしな。

俺は、紋章に手を触れ、小さく、天野伊那、と呟く。また、何か、変な感覚が身体を走ってきた。うほっう。超気持ちいい！ ヘンタイとか思った奴はまあ黙れや。

そして、俺は唐突に、伊那に質問する。それとない、質問を。

「そーいやさ、伊那。オマエの足ってまだ治んないのか？」

「あはは、そうなんだよねえ。何かね、治る日が分からないんだよね。って前もこれ、言わなかったっけ」

そうさ。前にも聞いたさ。けど、疑問だったんだ。オマエは、足が治らない。けど、軽く走る事は何故かできる。そういうレベルの怪我が、普通治る日が分からないなんて、あるのか？

その疑問は、俺の頭から振ってきた。

【ホントは、足……治ってるんだけどね。嘘、吐いてごめんね、結。

けど、陸上部の先輩達に、言われちゃったんだ。お前はもう、来るなって。足を怪我する奴なんて、陸上部として失格だから来るな、って。けど、だからこそ後輩達に教えてあげる事ぐらいはしてるんだけどね……】

「……っ!？」

「? どうしたの、結」

「い、いや。なんでもない」

春嫁が、急に表情を陰しくした俺を見て、聞いてくる。

俺は、それを軽く返し、思う。

成る程な……。そおいう事かよ、クソヤロウ。確か、伊那の部の先輩は、二年で足が異常に早い伊那のことを嫌ってやがったな。……ふざけた事しやがって。

……OK。能力の使い方、分かったぜ、ミィ。普通から、脱却する方法もな。

俺は、一つの事を確信し、決定すると、ガツガツを昼飯を、食べる。それを見て、伊那と春嫁が驚いたように俺を見て言った。

「うわっ。どしたのいきなり?」

「何? なんかヤケ食いみたいなレベルだけど」

「ちょっとな」

俺は、一呼吸置いて、いつものようなカンジで、軽く言った。

「腹ごしらえだよ、腹ごしらえ。ちょっと、体あ後で動かす事になるからな」

第五話 普通じゃない事（前書き）

今までと若干、結のキャラちがくね？とかう人は多分出ると思いますが、テンション上がると結君はこんな感じですよ。
決してキャラ崩壊なんてしてませんとも、ええ。

第五話 普通じゃない事

「さーてと、やるか」

俺は、陸上部の部室前に立つ。部室は、校庭のすぐ近くだ。

校庭では今誰も部活をやっていない。今日は普段なら部活はないんだが、陸上部はやるらしい。

今は放課後。今日は伊奈は部活行っていない日だし、大丈夫そうだな……。

一人呟くと、扉を開ける。

開くと同時、汗の匂いがした。ふむふむ、相当頑張ってるみたいだな。

中は部員用のロッカーが沢山ある。てか部室広いな。殆どロッカーで埋まってるが。

「あ？ 誰だお前？」

いきなりの見知らぬ来訪者に驚いたのか、少し目を点にしていた男や女も合わせた体育着の部員達の一人のがたいのイイ男が、聞いてくる。しかし部員多いな。男が今居るだけでも30、女が32人くらいか？

確かコイツは小崎こさきとか言う先輩で、確か自分よりレベル高い伊奈を嫌ってたっけか。

つうかコイツ部長だっけか。

あ？ なんで先輩をコイツ呼ばわりなんだって？ イイんだよ。コイツ、先輩と呼ぶ価値が皆無だし。あ、またコイツって言っちゃまった、てへっ☆ ……まあ心の声だけど。

「ああ、すみません、二年の天野伊奈の友達の、楽門結って言いま

す」

「天野……？ ふん、あの陸上部の面汚しか」

「ちょ、ちよっと小崎君、言いすぎ……」

小崎がムカツク程にムカツク態度を取ると、部員の一人……女の先輩の、体育着の胸に、鹿山しかやまと書いてある緑色の髪をしたショートヘアの先輩が、複雑そうな表情で嗜める。……胸でけえな。

っとそんな事はどうでもいい。見た感じ、小崎の言う事を肯定して
る奴は少ないみたいだな。小崎の言葉を聞いて、特に嫌な顔をせず
に笑ってるクソ野郎と、嫌な顔をしている奴らがいるが、圧倒的に
嫌な顔をしてる奴のほうが多い。笑ってるクソ野郎は、小崎含めて
男三人、女四人、か。全員小崎含めてチンピラみてえだな。……全
員先輩かよ、やりにくいなオイ。ま、ヤルけどな。

「うるせえぞ鹿山あ。本当の事だろうが。それで？ その天野の友
達が何の用だ」

「ええと、アイツに、怪我治ってるのに、部活来るなって言ったの
は何故なんですか？」

「なんだアイツ。チクツたのか？ まあいい。そうだよ、そう、言
った。アイツよお、二年の癖に調子乗っててよ、生意気なんだよ。
だから、まあ遠まわしに来るなって言ったわけだ。アイツ阿呆だか
ら、それらしい事言ったらすぐ走るのやめやがった。後輩に教えに
は来ててウケたけどな！ はははっ！」

「そうだよなあ、マジあいつうぜえよ」

「そだよねー。なんかあ、調子乗りすぎ」

「二年の癖に先輩様より上とかふざけんなよって話だ」

「あははっ！ 何様だよ私達！？」

小崎が笑い、数名のヤツラも笑う。逆に、大多数はそれを嫌そうな、
怒りの表情で見ている。

「成る程ね。……許せないなあ、オイ。普通くだらないことな事しやがって」

だから、俺は普通が嫌いなんだ。世界には、普通に人の痛みを考えない馬鹿野郎がイラつく程多い。そして、流されて人をみんながやってるからといって痛めつける奴も多い。

俺は、そんな普通が嫌いだ。

……OK。この野郎共を潰す躊躇は、今の会話で全部消えた。さて、と。

「ははっ！　　そういやあお前はあの馬鹿な女の友達なんだっけ？
だったらもしかして喧嘩でも売りに来た訳か！？　買ってやってもいいが、お前のその平凡な筋肉じゃあ勝てないと思うぜえ！？　さっさと帰れ————」
ドガアアアッ！！！！

轟音が、響く。そして、小崎の体が、部室の扉を越え、校庭へと投げ出される。

その様子を見て、投げ出された小崎本人と、他の、クソ野郎の部員や善良な部員が、啞然とした表情で、こちらを見ている。

「な……な、な……っ！？」

……まあ、人間一人、しかもあのガタイのイイ小崎がいきなり俺に腕をつかまれて、校庭にブン投げられたなんて驚くだろうなあ。思った以上だな。あれだけのモン投げたのに腕が痛むどころか砂を投げた程度の感覚だ。

おっと。それより、さっきの言葉を修正しとくか。

「小崎先輩は勘違いしてるなあ。俺は喧嘩あ売りに来た訳じゃねえ

んだ」

「はっ…！？ な、何言ってるやがんだ、お、お前！ 今、俺を投げ飛ばしたじゃねえか！ 明らかに喧嘩売ってんだろ！」

小崎が、少し頭が冷静になったのか、動揺しながらも、立ち上がり、俺に強気でほえる。

俺はその言葉に、髪を少し右手でかいてから、少し口元に笑みを浮かばせ、怒りを孕んだ目で、言った。

「虐殺だよ、一方的な虐殺。俺と喧嘩が出来るなんて夢みてえな事ほざいてんじゃねえぞ」

「っ……！ ナメてんじゃねえぞ！ 確かに力は馬鹿みてえにあるようだが……、オイ、お前ら！ 手伝えよ！ コイツ潰すぞマジで！」

その一声を受けて、中から、小崎と同じ、クソ野郎6人が出てくる。さっきの小崎ブン投げたのには驚いたらしいけどもう冷静になったのかよ。つうか女もいるし。

小崎と、6人が、俺を囲むようにして、近づいてくる。部室から、善人の後輩や先輩が心配そうな目をしている。

「ははっ、漫画じゃあこの人数でも勝っちゃまう野郎はいるが、ここは現実だ。この人数で勝てる訳ねえだろ」

「さっきの小崎投げたのにはびっくりしたけど、あんな頑張れば出来るモンだろ」

「つうかさ、今腕スゲー痛いんじゃね！？ やせ我慢してんなら病院いったほうがいんじゃないっ！」

「ぎゃはは！ どっちみちい、今から私らで病院送りにするから問題なくね？」

「そうそう！ ウチらがコテンパンに潰すからねー」

「あっははは。覚悟しろよ馬鹿後輩ー♪」

「女だからって、ナメちゃ駄目だぞお！　ぎやはは！」

七人の小人ならぬ七人のクソ共が笑う。

「いいねえ、本当にクソだ。やりがいがある。」

「うっせんだよ下種ボイス共。話してる暇あんなら掛かって来いよ」

「はっ！調子に乗ってんじやねえぞ二年んんんんんんんん！」

!!

「危ないっ！」

部室から、鹿島先輩が叫ぶ。

それと同時に男全員（三人）が殴りかかってくる。

「おらよっ！」

「うおっ! ? な、ま、まて——」

その内の一人の腕を難なくつかむと、俺は思い切り向かってくるもう一人の男に、その男を振り上げ、上から叩きつける！

「がっはあ!？」

「げぼおっ!!!?」

二人は、仲良く地面に伏した。

やっべえな、クソを潰すってスゲエ楽しいぞ！

「ぎやははははははははっ！
もつと頑張れよクソの先輩共！」

後輩に情けねえ姿晒してんじやねえよ!!!」

俺は激しく笑い、地面に伏した男二人を、足で軽く、蹴る。

それだけで、二人の体は凄い速度で小崎へと襲い掛かる！
それを何とか小崎は避ける。いや、偶然か？ まあそんな事はどう
でもいい。

「おおおおおおおっ！？ あ、あぶねえ！」

「こ、小崎い！ 後ろお！」
「え？」

傍観していた四人のクソの女のうちの一人が、叫ぶ。

後ろには、俺がいた。凄まじい速度で、一瞬にして小崎の後ろへと、
回り込んだのだ。

「なっ！ や、やめろっ！ やめてくれっ！ 悪かった、俺が悪か
ったから！」

回り込まれて、今までの俺の力を見て、適わないと重い、恐怖した
のだろう。

涙目で小崎が訴えてくる。知るかよ、そんなの。

「ぎやははははははは！！ ツレない事言わないでくれよ先輩い
iiiiiiii！ まだ始まったばかりだろうがよお！ ギやはははは！
！！」

「げぶっっ！！」

俺は、思い切り飛んで、右足で小崎の顔を蹴り飛ばす。

小崎の体が、地面へと投げ出される。……気絶してはねえみたいだ
が、もう動け無そうだな。つまんねえ。

なら、動けるまで、あっちやるか。

俺は、傍観していたクソの女四人へと目を向ける。

「次、そっちの番ですよ。楽しく、そこで気持ちよくさせてくださいよ?」

俺は若干下が入った台詞を吐きながら、笑いながら言う。
それに、女達が怯えながら言った。

「ちょ、ま、待ってよ! う、嘘でしょ!? 私達女だよ!? まさかマジでやる気じゃないよね!?」

「やめて、あ、謝るよ! う、こちらが悪かった! だからさ、許してよ!」

「そおだよお。そ、そもそも私達小崎にやろうぜ、って言われたからやっただけだし!」

「そ、そうそう! 全部悪いのは小崎! 私達、悪くないよ!」

本当に腐ってやがんなあ……。

まあ、だからこそやりがいがあんだけだな。

俺は、一気に走り、距離を詰めて一人の女の腹へ、思い切り拳を振る。

「かつはあっ!?!」

女が、地面に飛ばされる。……もう気絶したのかよなさけねえ。

「あ、え……」

「う、嘘……でしょ?」

「……や、やめ……」

残りの女三人が、それぞれの反応をする。どれも、恐怖と驚愕が混ざってるが。

俺はそんなヤツラを見渡して、軽く言った。

「女だからやられねえなんて都合おのイイ事考えてるなら爆笑モンだよなあ。世界は良くも悪くも男女平等だぜ？ 悪い事したら、誰でも殴られるのは当たり前なんだよ！ ははははははっ！！！」

そうして、俺は両手を伸ばし、三人のうち二人の頭を掴む。

「えっ！ ちょっと————」

「やめて————」

涙目ながら抵抗する二人を無視して、二人の顔面と顔面を思い切りぶつけあわす。

……ありゃ。もう白目むいてら。ほんと、女は気絶するの早いよなあ。

ま、いいや。後一人残ってるし。

「んじゃまあ、ラストはあなたですね。ラストだとなんか嬉しくないですか？」

「ひっ！」

俺は、そう言い、両手に掴んでいた二人を投げ捨てて、最後の一人に、詰め寄る。

その顔は、涙と鼻水でボロボロだ。

……キ☆モ☆イ☆

「何だよ……あんな奴の為だけに、なんでこんな事するんだよ！？ バツカじゃないの！？ なんで私らが———」

「黙れよ」

「っ！」

俺は、泣きながらなにやらぐちゃぐちゃ言っている女を見て、冷たく言い放つ。

「何でかって？ そんなの……決まってるだろうが。お前らが、俺の友達に、最低な真似をしたからに決まってるだろうが」

「だ、だからっ私らは小崎がやったからやっただけ……」

「普通がムカつくんだよ、クソ女。誰かがやってるからやった的な……普通だよなあ。けど、俺はそういう普通がかなりムカつくんだわ。……つと無駄に喋ったな。はじめますか？ せ・ん・ぱ・い・？」

「ひっ……！」

「ふうー……。あー、スッキリした」

俺は、校庭に立ちながら、あくびをしながら腕を伸ばして、誰に言うでもなく、呟く。

そして、視線を前へと移す。そこには。

「あ……が……」

「えう……」

「う……ご」

「うう……」

「あひ……」

「かっ……は」

「えうあ……」

七人のクソ共が、体を横にして、一人ずつ積まれていた。高さは2m? そんなもんか? わかんねえけど

……トータムポールみてえ。いや、クソタワーか。

その気になれば普通ならば逃れる事ができるだろうけど、俺に潰されたせいで力残ってないみたいだな。

ぶっ、滑稽だわ。みーんな体ボロボロで、部長さん以外鼻水涙だらだらだし。

クソ部長、小崎がてっぺんにつまねながら、こちらを少し見る。

お? 流石はクソ部長サマ。元気ですねー。

「て……め……え。こんな、こととして、どうなると思ってやがる……。は、はは……チクツたら、退学、モン……だぜ」

「マジか。いやはや、それは困るなあおい。まあチクられたらそれはそれで……」

俺は一呼吸置いて、言い放つ。

「逆恨み的な感じで先輩方を毎日つけまわして、毎日ボコりますかね」

「ひっ!?!」

俺の声音で、本気だと悟ったのだろう。

小崎は怯えた表情で俺を見る。

さ、て、と。

もおいしいか。とりあえず、こんぐらいしとけば、伊奈に手を出す訳なんざないだろうし。

「そんじゃまあ、伊奈にはもう、酷い事しないでくださいね。後、

謝っといってくださいね。……それが出来なかったら、次は、もっともつとぶつ潰してやるからなああああああああああああああああああああああああ！……！」

俺は力を入れて、右足を思い切りクソタワーに蹴り入れる。

「ぎゃあああああ！！！！」

クソ共が倒れていき、悲鳴を上げながら地面へと落下する。

衝撃と恐怖とかで色々一杯一杯だったのか知らんが、気絶してんな。オーケーオーケー。

こいつらもまあ、伊奈には手え出せないだろ。

「んじゃ、帰るかな」

もう用は済んだし……、割と遊んでたら遅い時間になったしな。もう6時だ。

「ま、待って！」

「ん？ ……ああ、ええと、鹿山先輩、でしたっけ。何ですか？」

俺が帰るために歩き出すと、部室の付近から声が聴こえたので、立ち止まり、振り向くと、鹿山先輩と、その他の部員の人たちが、部室から出て、校庭へと出てきていた。鹿山先輩が、声をかけてきたらしいな。

つーかやばいな、ちょっと楽しすぎて周りが見えなくなったた。

いくらくそだからといって、伊奈の件があっても流石に表ざたに女すら叩き潰すのはアレだったかなあ……。

なんかお叱りでも受けるんだろうか。仕方ない事だけど。

しかし、俺の予想とは、違った。

「あの……ありがとう！」

「……へはい？」

あまりにも予想と違った一言に、へ？と、はい？が混ざってしまったぞ。はずかしい。

「えっと……何に対しての、ありがとう、なんですか？」

「あいつらをぼこぼこにしてくれた事だよ。あいつら……私と同じ3年生なんだけどね。伊奈ちゃんだけじゃなくて、他の子にも、似たり寄ったりな嫌がらせをしたの。自分よりちょっと足が速いからってだけで。だから、ありがとう。あいつらはこれ以上はもう何もしないと思うし、これで、伊奈ちゃんも、他の子も……全員、大丈夫。だから……本当にありがとう！」

鹿山先輩が頭を下げ、それに続いて他の部員も頭を下げ、ありがとうございました！！とお礼を俺に言う。

俺は陸上部の人たちに、軽く笑ってから、足を進める。帰るために……ああ、いいなあ。いい人たちだ。こういう人たちもいるんなら、伊奈ももう大丈夫だろう。

それにしても少し照れくさいな。感謝されるのは嫌いじゃないけど。にしても、今までの俺ならこんな普通じゃない事、出来なかっただろうな。今回にしても、俺はミィから貰った力が無ければ、成し遂げられなかった。

これなら、悪い普通を、叩き潰せる。

そして、良い普通じゃない事ばかりが、出来る。

この力で、俺は変われる。

普通じゃない、最高にいい事が出来そうな気がして、俺は思わず笑ってしまった。

その頃、楽門家。

[illegible]

(ひ、ひっ！ ゆ、ゆゆゆゆ、結！ 早くかえってきてよー！
あなたの妹が、凄く大変な事になってるよー！)

第六話 普通な青春と、普通じゃない展開の予感その2（前書き）

割と長いかもです。

感想とか、アドバイスとか、できればお願いしますっ。

第六話 普通な青春と、普通じゃない展開の予感その2

「へえ。それじゃあ、まとめると、結はその伊奈ちゃんという一人の女の子の為に天使の力を振るつたんだ？ かつこい」

「茶化すなっの」

翌日の朝。今日は土曜日で、学園はない。

俺は昨日あった事を、リビングのテーブルの椅子に座りながら、同じくして座るミイに、語っていた。

昨日の内に話しておこうと思ったのだが、何故か帰った瞬間、陽が物凄い勢いで迫ってきて、そのまま夜まで何があったかを絶え間なく質問され続けて、ミイと話す暇が無かったのだ。

そんな陽は今は、朝早くから、生徒会の仕事がある、などと言って休みの日にも関わらず、家を出てしまって、いない。

あ、ちなみに説明しなかったかもしれないが、陽は中学三年生である。それで、生徒会長である。信じられないのである。冗談が過ぎるのである。けど、事実なのである。

まあそれはいいとして、そこで、丁度いいと思い、こうして今ミイに語り終えた所だったのだった。

「でもでもー。結局その悪い先輩達がいたら、伊奈ちゃんも落ち着けないんじゃないかな？」

「……それは確かに。でもまあ大丈夫だろ。謝らせる様にちゃんと言っといいたからな」

「へえ。……そう言いながら、なんで制服に着替えようとしているの？ 今日、休みだよね？」

ミイの言う通り、俺は今、制服に着替えようとしていた。

理由は……まあ、恥ずかしいから絶対言いたくはないが。その、ま

あ伊奈が少し心配なのだ。
というかそれよりも……。

「俺は制服大好き制服フェチ男だからだよ。……つかミイ。お前、俺の……男の着替え見て、恥ずかしくない訳？」

「……ふえ？」

そう。今俺は、私服から、制服にと着替えている。

上はもう着替え終わり、長袖の制服で、下を着替えようとして、ズボンを下ろそうとして――――

「―――っ！？　ご、ごめんなさいいっ！」

「おい、ミイ……ってはやつ！？」

全速力でミイがリビングを飛び出て、自分の部屋へと駆け抜けていく。

……天使の力でも使ったのか、文字通り目に見えないレベルの速度だった。

天使の力大安売りですね……。

「まあいいか……。さて、行くかな」

俺は、制服に着替え、玄関を出る。

6月の半ばだからか、微妙に暑い。太陽が、俺の体を照らしてる。

7月はずっと暑くなるんだな、と思うととても嫌な気持ちになってしまう。

いゃん。そんなに俺を熱くしないでえ。いゃん。

……きもくボケてみたが、暑さは変わらない。

そういや、今日は夏と同じくらいの暑さってテレビで言ってた気がする。つか、天使の力を持っても、暑いのは変わらないのか。

「早く衣替えしねえかなあ……」

確か、衣替えは来週の水曜だった気がする。待ち遠しい。

俺は、そんな事を考えながら、暑さを少しマシにするため、長袖の裾を、まくって、半そでの長さにして、学園へと歩を進める。

「やっと着いたか。遠いんだよ畜生」

校門の手前で、悪態をつく。

こんな暑さなのに、複数の部活が、頑張っているような声が聴こえる。

校庭ではサッカー部や陸上部、そして野球部など。近くの柔剣道場ではヤアー！とかいう悲鳴のような声も聴こえる。

それにしても、疲れは天使のなんちゃらかんちゃらかで全く無かったが、暑さは変わらなかったお陰で汗で制服がびちゃびちゃだ。

「いや、待てよ？　びちゃびちゃは流石にえろいか？　なら、びちよびちよか？　いや……濡れ濡れ？」

ううむ。思春期だとかかなり下らん事を考えてしまうな。……ていうかミィ曰く俺の脳は天使の（略）でよくなってる筈なのに、知能レ

ベルが全然上がってない気がする。哀しいな。
暑さにやられたのかもしれないが。とりあえず、そうだな。

「ぬちゃぬちゃでいいか。うん、これならあんまエロくない」

「えろいよ!」

「おうっ!？」

呟いた瞬間、声が聴こえ、驚いて、声が聴こえた方を向く。という
か、声が聴こえたのは前だった。

くだらない事を考えているうちに、前に居たことすら分からなかつ
たらしい。どんだけぬちゃぬちゃの事に頭使ってたんだか俺は。

そして、前を向くと、校門に入ったすぐそこに、体操着を着ている
鹿山先輩が、こちらを微妙に呆れた目で見ていた。

ちなみに、体操着と言っても下はブルマではなく普通のハーフパン
ツだ。

ふざけやがってエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ
エエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ

おっと、暴走してしまっただ。会話をしなければ。

「こんにちは、鹿山先輩。というか、いきなり、えろいよっ! って
何ですかもう」

「い、いや……だって濡れ濡れだとか色々……ってそれはもういい
や。言ってるで恥ずかしいし……」

「ぬちゃぬちゃなら大丈夫ですよ、先輩。まあいいや。その、今日
は伊奈、いますか?」

先輩がいるのなら、話は早い。

さっさと状況を聞こう。

俺が聞くと、鹿山先輩は、少し笑って言った。

「伊奈ちゃんが心配？」

「べ、別に伊奈が心配な訳じゃないんだからね！」

「？ なにそれ？」

「ボケに素で返されると結構辛い事に気づいた。……ツンデレです。まあ意味は省略で。それよりも、ほら、伊奈、いるんですか？」

「ふふ、心配なんだね。いるよ。今は、外周に1年と2年で皆で行ってる。明るくやってるよ」

「……明るく、ですか？ あの馬鹿共の事は、気になってないんですか？」

あんな奴らがいたんじゃ、伊奈はそうすぐには落ち着いて明るくならない気がするんだけど。

すると、俺の問いに、鹿山先輩は、少し苦笑して、言った。

「いやあ。実はね、あいつら……昨日楽門君がぼこにした後、すぐに退部届けを出してきたんだよね。もう楽門君には関りたくないって言って。だから、安心して伊奈ちゃんは練習できるんだよ。あ、ちなみに私は小崎が退部をしたから、自動的に部長になったんだ」

「そうなんですか」

それなら、安心だ。

伊奈に謝るという約束を破ったのには腹が立つが、退部をしてくれるなら、それでいいか。

伊奈は、これで、色んな意味で、走る事ができる。さて、と。それじゃ……。

「なら、安心しました。俺は帰ります」

「そっか。伊奈ちゃんの練習見ていけばいいのに」

「いやあ、流石にこの暑さの中練習を見守るのは自殺モンなので今

日は遠慮しときます。それじゃ」

まあ、本当はなんだか伊奈の顔を見るのが少し照れくさかったただけなんだけどな。

俺は、校門の手前から後ろに体を向け、家に向かうため、歩き出そうとして――

「？」

右腕に重みを感じた。

何だ？　そう思って、右腕を見てみると。

「~~~~~？」

「……………」

俺より頭が一つ文小さい女の子が、俺の腕に、しがみついていた。より性格に言うなら、オレンジ色の、鮮やかなショートヘアーで、髪を一つ横に短く束ねているサイドテールの、体操着を来た女の子が、少し膨らんだ胸を押し付けながら、俺の腕にしがみついている。おいやめてやめれ。俺の理性が壊れます。

しかも、なんか目をきらきらさせて、超いい笑顔で。

そして、表情と体勢を崩さず、俺に向かって言った。

「楽門結先輩、ですよね!？」

「お、おおう。いかにも俺が楽門くんだが……。お前……。じゃないナイ、君は？」

「わぁー、楽門先輩に会えて、本当に嬉しいですっ！　私、1年C組、陸上部の、水鷄^{くいな}麻乃ですっ」

水鷄ちゃんって言うのか。元気で明るく可愛い娘だな。

胸も微妙に小さいながらも、ふくらみを感じさせるそれは、まさに女の子の……ってそうじゃねえよ！

疑問なのは……。

「そのー。水鶏ちゃん？　いつまで腕に抱きついているつもりなのかな？　流石に胸が当たって興奮して理性が壊れそうなんですが」

[illegible]

馬鹿か！？ バカか！？ ばかか！？ バ☆力なのか俺は！？ 何正直に最低の感想吐いてんの！？

絶対引かれるぞ！？

絶対ゴミ虫を見るような目で俺を見てるんだろうなあと思いつながら、水鶏ちゃんを見ると。

「私を意識してくれてるんですかっ？ それなら嬉しいですけど？
でも、理性が壊れちゃったら大変そうなので、残念ですけど、腕、
ほどきますねっ」

そうやって、水鶏ちゃんは、するりと腕を解いた。

そんなことより、ゴミ虫どころか……聖母のような暖かい眼差しで見てくれているだとい？（※興奮して多少頭がおかしくなっています）

なんて慈悲深い娘なんだ……。

「あの、楽門先輩っ」

「ん、ああ、何？」

俺がそんなどうでもいい事を考えていると、水鷄ちゃんが、少し頬を染めて、上目遣いにしながら俺の方を向いて、言った。

何故に頬を染めながらもじもじしてらっしゃっているのだろうか。そして、さつきから後ろで鹿山先輩がにやにやしているのは何なんだろうか。何も言ってこないし。

そして、意を決したように、水鶏ちゃんが、俺の方を向いて、はつきりと——言った。

「先輩が大好きですっ。私と……付き合ってくれませんかっ!？」

「……………え？」

今、
なんて言
った？

好き？ それって――

[illegible]

俺と、途中から他の陸上部の皆と外周から帰ってきたらしい伊奈と、俺の絶叫が、重なる。

そんな中、鹿山先輩だけが、面白そうに、愉快に笑っていた。

俺は、クソ暑い中、少し汗をかきつつ、陸上部の部室の付近にある、

タイヤ（恐らく引っ張って走ったりするのに使うのだろう）に腰かけながら、同じようにしてもう一つのタイヤに腰掛ける鹿山先輩と、会話していた。

あの、衝撃の告白後、水鶏ちゃんは意外にも、今は部活の時間だから、と言ってあっさり引いた。後で、返事をしてくださいとは言われたが。

それで、ほぼ皆が、今は練習を、目の前の校庭で練習していて、伊奈は走りこみを何回もやり、水鶏ちゃんは長距離専門なのか、さつきから校庭を何週もしている。やはりブルマじゃないと映えないよなあ……。

鹿山先輩は、今日は具合が悪いので、走りはせず見学中らしいので、折角だから、水鶏ちゃんの事を聞いてみることにしたのだ。

一応、告白を受け入れるか拒むかは別として、少しくらいは告白してくれた娘の事は知りたい。

そして話を聞いてみたのだが……。

「まあまとめると、麻乃ちゃんはね楽門君に救われた子の一人って事なの」

「要するに、小崎にいびられてた後輩の一人って事ですか」

「うん。小崎はね、伊奈ちゃん以外にも、何人かの子をいびっててね。その内の一人が、麻乃ちゃんなんだよ。麻乃ちゃんの場合は酷くてね、ここ一ヶ月は全く部活に来てなかったんだよ。……私達が、小崎たちを止められなかったから、なんだけどね。本当に情けない」

そう言い、少し自虐気味に鹿山先輩は笑う。

成る程な……。水鶏ちゃんは、伊奈と、同じだったって訳か。

本当にゆるせねえなあ……。小崎の野郎共。マジ、ファッ○！○アツク！フ○ツク！ファ○ク！。あ、伏字意味ないね。すみません。つとまあそれはもういいとして……。

「でも、何故にそれが俺への告白に繋がるんでしょうかね」

ぶっちゃけ、間接的にはいえ俺は水鶏ちゃんを助けたと言えるの
だろう。

そして、その事で自己評価でもなんでもなく、単なる事実として少
なからず俺に感謝を水鶏ちゃんがしてくれているであろうことは分
かる。

けど、それイコール告白には普通繋がらないだろう。エロゲでもな
いんだし。

そんな俺の考えを笑うかのように、鹿山先輩は少し笑って、言った。

「楽門君、もう少し自分のルックスを自覚した方がいいよ？」

「はい？」

「だからね、君は結構ルックスはいい方の部類に入ってるんだよ」

「いきなり照れる事言いますね。けど、仮にいいとして、それが？」

「だからね。麻乃ちゃんはね、私が昨日の事を電話で話した瞬間
から、君に感謝と興味を持って、会ったらお礼をしたいとまあ思
ってた訳。そこに、今日君がきて、しかもルックスが結構いい部類
だと分かった。助けてくれた感謝すべき恩人＋ルックスの良さ＝好
感度上昇で、告白に繋がったって事なんだよ」

「は〜……成る程。そりゃあ嬉しいっすね」

「本当に嬉しい？」

「そりゃ勿論。水鶏ちゃん、可愛いですし。正直俺の好みど真ん中
ですよ。守ってあげたくなるような後輩キャラ的な」

「本当ですかっ？ 嬉しいですっ！」

「あら」

「おうっふっ!？」

俺が話していると、後ろから、可愛らしい歓喜の声を出しながら、
いきなり水鶏ちゃんに後ろから抱きつかれて、変な声を俺は出して

しまった。

そしてそのまま、にこにこしながら頬を染めて、俺の背中に体をすりすり当ててくる。

スリスリッ

……けっして大きくないが、小さくもない、平均的だが、膨らみがある女の子の胸が当たっている。

やばい。俺の息子が、クララが立っちやうとうつうつうつうつうつうつうつうつうつうつうつ。

……つてまあそうじゃなくて。何時の間に後ろに來たのやら。さつきまで目の前の校庭で走っていたのに。

「あ、麻乃ちゃん。もうメニユーの校庭30週終わったの？」

「はいっ。終わりました」

鹿山先輩が、のんびりと涼しげに、水鶏ちゃんに聞く。

つか30週て……死ねるぞ。いや、今の俺の力ならいけるかもか。
てか、だから汗でベトベトでなんか匂いをするのか。

……女の子って汗臭くてもいい匂いにするもんだね。まあ俺が匂いフェチなだけかもしれないけど。くんかくんか！ってね。

しっかしまあそんな事よりも……。

「水鶏ちゃんでもしかして相当体力あるん？」

「ええっ？ そんな事はないですよ。一ヶ月も部活行ってなかったの、なまっちゃってますし」

苦笑しながら、そのオレンジ色の髪を撫で、水鶏ちゃんは言った。
いやあ……でも……やっぱ体力半端ないと思うがね。だって……。

「いや、体力相当あるでしょ。こんな短時間で30週とか。他の長距離系選手はまだ走ってるみたいだし」

そう、見た感じ、校庭を何回も走っている、長距離系選手の姿何人も見られる。というか、長距離系選手全員なんだろう。

皆、一年生の水鶏ちゃんより年上ばかりなのに、未だに終わっていない。

これは相当にレベルが高いことをあらわしているだろう。しかもこれではなまってるって言うのか。

俺のそんな予想を肯定するかのよう、鹿山先輩が言った。

「麻乃ちゃんはね、全国レベルの選手なんだよ」

「全国！」

「うん。まだ公式な大会は出てないけど、走り見た感じそうだね。」

私のお父さん、元陸上の選手なんだけど、麻乃ちゃんの走りを見た感じ、全国レベルだったって言ってたし」

「ほ。水鷄ちゃんは凄いなあ」

「そ、そんな事ないですよ。……でも、楽門先輩に褒めてもらえて、嬉しいですよ」

「…………可愛いなあ畜生」

「うわっ!？」

「ど、どうしたんですか楽門先輩っ？」

「! あ、ああ、いや、何でもない。ちよつとな、吠えてみたくなつたんだ。厨二なもので。ごめんね」

「ふふっ、そうですか。面白いですね、楽門先輩っ。それじゃあ、まだ部活があるので、私はこれで」

そう言って、笑顔で手を振りながら、再び校庭に水鶏ちゃんが走っていく。

それを見送って、俺はため息を少しつく。

（あ、危なかった……。頬染めて照れながら、もじもじしながら、上目遣いとか、反則すぎندろうがよお!? 可愛い娘がやるとマジ可愛いもんだなあ。思わず発狂しちまったじゃないか。でたらかな音声すぎて内容までは気取られなかったようだけど）

俺は、もう一回ため息をついて、隣のタイヤに腰掛けながら、急に発狂した俺の事をなんだか不思議そうな目で見ている鹿山先輩に、体を動かさず、言った。

「鹿山先輩」

「ん？」

「もじもじプラス頬染めプラス上目遣いって……。反則っすね」

「いきなり何!?」

「こっちの話です」

「じゃあ私に言わないでよ!?」

「にしても、喉渴いたな」

「にしても、露骨に話題変えたね」

「いやあ、でも本当に喉渴きませんか？」

「そうだねー。いくら私達が一步も動いていないって言っても、一応ここひなただしね。暑い暑い」

「はー。こんななんなら飲み物持ってくりゃよかつー―bud
weiduedghuecoldhgwdhgsgsiuwdqh
っ!?!?」

俺の言葉が途中で途切れ、意味不な言葉になる。

今の叫び声で、陸上部の方々が、いろんな場所から俺を微妙そうな目で見ってくる（さっき発狂したときもそういう目で見られた）。やめて! 仕方ないじゃないか!

だっ
ていきなり首の後ろのところに、冷たい感
触が出現したんだもの。

一体何なんだよこの×××野郎オオオオオオオオオオオオ（×××の文字は想像にお任せします）と思いながら、後ろを振り返ってみると。

「あははっ。いいビツクリ具合だねっ結」

そこには、魔法瓶と言われる、シンプルで、大きい形状をした赤色をした水筒を片手に持った伊奈が居た。成る程。あれで俺の首に触れたのか。

ちなみに服装は勿論体操着。ブルマ無し。ざけんな。

見た感じ、以前までの、走れない事への憂鬱さは、なくなっているようにで安心した。

だが、今はそんな事はどうでもいい。今やるべきことは、一つだ。

「伊奈。ちよつとこつち来なさい」

「別にいいけど……」

そう言って、魔法瓶を地面に置いて、タイヤに腰掛ける俺の前へと来る伊奈。そして、スペースの空いたタイヤの部分にと座る。

従順にする伊奈に、俺は、にっこりと微笑み。

グ
リ
ツ

頭の左右に拳を当てて、ぐりぐりとまわした。

[illegible]

「いたたたたたたたたたたただだだだだだだだだだだだ！？」
ごめんなああああいいいいいいいいいいいいいいいっ！」

馬鹿二人の、大声と叫び声が、校庭に響き渡り、緑色のツインテールが揺れる。

その後、それを見つけた陸上部の顧問に二人仲良くそろって怒られたのは、言うまでもないだろう。

ちなみに、顧問が登場した瞬間に厄介ごとには関りたくないと言つた様子でさつさと鹿山先輩は校庭の別の方へ駆けて行きました。

はっはっは。後輩見捨てる先輩ってどう思う？

「はあ……。で、一体お前は何をしに來た訳」

俺は、顧問の鉢巻先生（体育会系で、ムキムキの先生）にこっそり絞られ、疲れ果てた声で、タイヤに再び腰掛けながら、さっきまで鹿山先輩が座っていたタイヤに腰掛ける伊奈に、話しかける。ちなみに、今は休憩時間らしい。

「はあ……。あ、ああんんだか喉渴いたーって言ってたみたいだから、この魔法瓶の中身を献上してあげようかと」

「マジか！　くれっくれくれくれくれくれクレクレクレ！！！」

俺は、その言葉を聞いた瞬間、飛び掛るように伊奈のタイヤに行き、伊奈に近づいて、言った。

「わわっ。近い近い！ そんながつつかなくても、あげるよ。はい」
「サンキュウウウウウウウウウウウウウウウウ！！　ゴクツゴクゴクツ……」

渡された魔法瓶の蓋を取り、がぶがぶと飲む。中身はア○エリアスのようだ。ふうーっ喉が気持ちいいー。間接キスになるかもと思っ
たが、口はまだ一回もつけていないらしく、中身は満タンだ。
何時の間にか、俺は全部を飲み終えてしまっていた。ありゃ。

「悪い伊奈。つい全部飲んじまったみたいだ」

「いいいいいよ。私、通常10本は魔法瓶それ持って来てるからね」

「10本で。そりゃ凄いきち……ゴッホンッ！　用意周到だな」

「今、何か言いかけたよね？　きちがいって言おうとしたよね絶対」

「ナンノコトヤラーオフォオフォオフォ」

「何その笑い方？　まあいいや。そんなことより、その……どうするの？」

「あー？　何が」

「麻乃ちゃんの告白、だよ。受けるの？」

「あー……」

まあ避けられねえ話題だとは思ってたけどな。

ま、正直な感想言えば、水鶏ちゃんはアレですよ、相当可愛いね。
正直、さっきも言った気がするが、好みど真ん中なのだ。陽に言っ
たら本当に何されるかわからんけど、まあとにかく俺のストライク
ゾーン直結なのだ（今思ったけどこの言い方古い？　古かったらご
めんなさい）。けど。

「少なくとも、今は受け入れる気はない、かな……」
「……そうなんだ」

陽が、少し拍子抜けしたような顔で、短く呟く。

そう。今は何だか受け入れる気が起きないんだ。この、ミスロー
フ^{スライナ}Ⅱウィリマというふざけた天使から授かった、圧倒的な身体
能力と、それと微塵も感じられないが、圧倒的な頭脳と、『心覗き』
という微妙なようにいて以外に使える異能力。

当分は、この能力で出来る事を探す事に集中したい。

だから、言い方は悪いかもしれないが、恋愛に割く時間は、今の俺
には、ない。

「でもさー。なんで結を好きになったんだろうね？ 麻乃ちゃんは。
不思議でしょうがないよ」

「そりゃ俺がイケメンだからじゃないのか」

「いや、真顔で冗談言われても困るんだけど。何だろうねー。一目
惚れとか？ 今時ないかなーそういうの」

俺の冗談を軽く受け流し、伊奈は軽く芝居がかかったように腕を組
みながら、考える。

ま、本当は昨日の件の事で好かれたらしいが、昨日の事はあんまり
伊奈には言いたくないし、先輩方にも伏せてもらうように頼んだ。
何となく、昨日やった事を伊奈に明かすのは照れくさいし、それ以
前に、俺は暴力でものを言わせたのだ。いくらなんでも、伊奈でも
流石にそれを聞いたら幻滅してしまうかもしれないしな。はー。友
情って儚いですからねー。

「伊奈ちゃん。練習始めるよー」

校庭から、さっき一人で颯爽と逃げやがった鹿山先輩が、こっちに手を振って呼びかけていた。その周りには、他の部員達……勿論水鶏ちゃんも集まっている。

ほー。見学だったのに、頑張るな。流石は部長。さっき逃げたけど。大事な事だから、もう一度。さっき逃げたけど。あ、しつこいね、サーセン。

「はい！　じゃ、行って来るね結」

「おう。行ってらっしゃーい」

軽く走って行く伊奈に、軽く声をかけてから、俺は、一人、呟いた。

「暑い」

「すみません、少し話し込んでやって」

私は、走って皆が集まる校庭の中心まで行き、新しく部長になった鹿山先輩に、謝る。

ちよつと、結と話し込んでやって時間忘れちゃってたしね。

「いーよいーよ。さ、皆集まったことだし、練習やるよ。厳しくね！　私は見学だから今日はやらないけどね！」

『横暴ですよー』

偉そうに、腰に両手を当てて言う鹿山先輩……じゃなくて、部長に、部員皆の非難の声が浴びせられる。

勿論、本気ではなく、冗談めいた非難だ。

小崎先輩達が居た頃には……こんな光景、信じられなかっただろうな。言い方は悪いかもしれないけど、正直、退部をしてくれてほっとしちゃってる。一体、なんで退部をしたんだろう。鹿山部長に聞いても、適当にあしらわれちゃうし。なんなんだろう、気になっちゃうよ。うずうず。

「いよーし、じゃ、練習の割り当てを確認するよー長距離走の人は――」

鹿山部長が、練習の割り当てを淡々と告げていく。長距離専門の私は、また外周らしい。うにゃあ……自分で選んだとはいえ、長距離走選択者は辛い練習だなあ……。これは、夏間近の今には相当に応えるね。まあそれでも私こと、伊奈はがんばって走ろうと思います

が。
私は、基本的に良く結や春嫁から、力を一気に使ってバテるタイプに見えるとかで、短距離走専門だとか失礼な勘違いされるけど、私のメインは、長距離走なんだよね。

短距離走も好きだけど、長距離は、長く走って疲れた後の達成感が大好き。これを以前結に言ったらドM女とか罵られたけど、なんなんだろうね。同じ長距離選択の麻乃ちゃんには分かるのに。

ここが、陸上部と帰宅部の違いなのかな。ていうか、あの二人も部活やればいいのに。結は割とスポーツ出来るし、春嫁も見た目に反して凄く出来る。なんで部活やらないんだろ。よけーなお世話だとは思うけど、もったいないなあ。

「伊奈先輩っ。一緒に走りましょう」

「えっ？ ああ、うん、そだね走ろっか」

そんな事を考えていると、何時の間にか近くまで来ていた麻乃ちゃんが、純真な目でこちらを見上げて、走りに誘ってくれたので、私は誘いにのった。

そいえば麻乃ちゃん、走りのペース速いんだよね……。合わせるのは難しくは無いけど、相当疲れそうだなあ。うにゃあ……。

今まで、1年生の中でも麻乃ちゃんが部活に来ていた間は、相当指導をしてたけど素質が半端ないんだよね。先輩顔負けだよ。……いや、胸はぎりぎり勝ってるからいいのかな。って何でこんな脈絡ない事考えてるんだろね。

言ってる事少し矛盾するかもだけど、走るのは好きだけど、疲れるのは嫌いなんだよね。

まあ、とにかくにも、走らないといけないので、私は麻乃ちゃんと一緒に、外へ出るため校門の方へ走って行く。外周だから、個々のペースでバラバラに走っていいんだよね。走っていく前、結がくつろぎながらタイヤに寝そべって右手をぶんぶん振り回してくるので（多分、頑張れーという意味？）私と伊奈ちゃんは、それに手を振り返して、校庭の外へと走って行く。

「はあっ……はあっ……」

フォームを整えて、隣の綺麗なフォームで走る麻乃ちゃんに、合わせる。

うん……やっぱりさっきの練習中で分かってたけど、私、相当鈍ってるね。少し走っただけで、息が苦しくなる。まあ、これはこれから取り戻していくしかないかな。

それにしても……。

「はあーっ…… はあーっ……」

隣で走る麻乃ちゃんを見て、麻乃ちゃんも十分に鈍ってる事が感じ取れた。私と同じように、少し走っただけで息が微かにだけど途切れてるし、そもそも、私のこんな鈍った状態でも十分についていけちゃうレベル。これから、頑張って二人で取り戻していこうね、何て心の中で一人で勝手に約束してにこにこしている内に、何時の間にか7週目を迎え、外に一定感覚を空けて並んだ並木に見飽きていた時、麻乃

ちゃんが少し途切れた息を吐き出しながらも、にこにこ笑いながら、正面を向きながら、言ってきた。

「はあっ、はあっ……。やっぱり、鈍っちゃってますね、私達……」

「はあっ、うん、そうだね……。まあ、これから、はあっ……。取り戻していけば、いいよ」

「そうですねっ。はあっ、頑張りましょうね、伊奈先輩。……それにしても、外周で良かった……。こんな走り、楽門先輩に見られたく、はあっ、ありません、し」

「あははっ。陸上部じゃないんだから、そんな細かい事に気づかないよ」

本当に、麻乃ちゃんは結の事が好きなんだなあ。それにしても……。

「なんで、麻乃ちゃんは結の事を好きになったんだろう……」

「はい？」

「!？ あっ、ごめん、はあっ、なんでも、ないよっ!」

しまった。走りに集中してたせいか（関係ないかな？）思ったことをそのまま言っちゃったみたい。うにゃあ、恥ずかしいねー。けど、麻乃ちゃんは走りながらも、にこにこ相変わらず表情を崩

さず、その微笑を、更に深めて言った。

「何でって、それは……楽門先輩が、私を……私達を助けてくれたからですよ」

「助けて……？」

「はい。鹿山部長に聞いたんですけど、私達が今こうして、普通に楽しく部活を出来ているのは、楽門先輩のお陰なんです。あ、これ伊奈先輩に言っちゃ駄目なんだった……。まっいいかな」

「結……の？」

走りながら、疑問が頭に沢山浮かぶ。どういふことなんだろう。結が、私達を助けた？

その疑問を、麻乃ちゃんは走りながらも、答えるように言葉を紡いでいく。嬉しそうに。文字通り、恋する少女のように。

「昨日、部活の時間……、急に楽門先輩が陸上部の部室まで来て、小崎先輩達を、完膚なきまでに叩き潰したらしいんです」

「ゆ、結が？ な、なんで……」

「あははっ、伊奈先輩の為、ですよ。楽門先輩、伊奈にはもう酷い事はするな、次やったら、もっと潰してやる、って言ってたらしいです。それは、伊奈先輩を助けるためだったけど、結果的に、それが私達、他の部員までもを助けてくれた。そんなに格好いい事をされて、惚れちゃわない訳が、ないじゃないですか」

「————」

結が、私の為に——？

何で、私と小崎先輩達のことを、知っていたんだろう。

いや、そんなことはどうでもいい。

結が、私を、助けてくれた。

そのことだけで、胸が、一杯になった。

涙が、目から溢れ出す。

不快な気持ちからでる涙じゃあなかった。

嬉し涙。その言葉が、一番似合う、涙だった。

そして、私の中で、何か、気持ちが大きく揺れ動く。

それは、今まで感じた事のない、不安定な、それでいて心地よさが
滲み出てくる感情。

それは――――

「そっか――」

私は、短く言った。

そして、涙を少し拭いて、笑って、隣で走る麻乃ちゃんに向けて、
言った。

「それは確かに、惚れちゃうね――――」

「よし、んじゃ、今日はこれで終わりっ！ 有難うございました

」

『有難うございました！――！』

時刻は12時30分。どうやらやっと部活が終わりらしく、部長の

言った瞬間、陸上で鍛えたであろう足で、思い切り顔面を蹴られた。あ、天使の力あるんで、全然痛くないでふ。……心のダメージは半端ないね。もう死にそう。

あ、ちなみに上の下着の色はピンクでした。可愛らしいー。

伊奈は、少し照れたように顔を膨らませて、無言で校門の方へと進んでいった。

さて、と……。

「これで、いいね。水鶏ちゃん」

「はい、楽門先輩……」

俺は、残った一人……。水鶏ちゃんに声をかけ、タイヤを立ち上げる。二人つきりで話したかったから、伊奈を追いついたんだ。

こういうのは、野次馬はあんまりいてももらいたくない。

水鶏ちゃんは、息を吸い込んで、緊張した面持ちで、頬を赤くしながら、はっきりと、言った。

「もう一度……言いますっ。私、水鶏麻乃は、楽門結先輩の事が、大好きですっ！ 私と、付き合ってもらえませんかっ？」

俺は、その答えに、一瞬も迷わず、きっぱりと、告げた。

「ごめん」

「っ！ ……そうですよね。すみません。流石に……いきなり告白して、OKもらえる訳がないですよねっ。ありがとう、ございましたっ……っ！？」

そう言って、泣きそうな顔をして、スポーツバッグに手を掛けて、帰ろうとした水鶏ちゃんに、俺は即座に右手首をつかむ。

驚いた顔をして、水鶏ちゃんがこちら側を向く。そして俺は水鶏ち

やんに向けて、言った。

「ごめん。けど、水鷄ちゃんが嫌いな訳じゃないんだ。ただ……言い方は悪いかもしれないけど、今は、恋愛以上に、頑張りたい、やってみたい、大切な事があるんだ。自分勝手な真剣じゃない返事でごめん。だから……定番の、この言葉を言うね」
「……？」

俺は、一呼吸して、言った。

「友達から、始めよう」

「え……？」

少し呆然とする水鷄ちゃんに、俺は目線をしっかり合わせて、続きを言う。

「もう一度言う。俺と、友達になろう。そして、ありきたりすぎる言葉で悪いけど、友達になって、お互いを知っていきこう。そして……お互いを知って行って、俺が、やりたい事を終えて、それで、俺の事をまだ好きでいてくれたなら、俺に、もう一回告白してくれ。その時は、俺は、本気で、真剣に……水鷄ちゃんの告白に、答える。それじゃ、駄目かな？」 麻乃ちゃん」
「……っ！ は、はいっ……。分かりましたっ……。！ よ、よろしく、お願いしますっ……。！ 」 結先輩っ」

俺達は、握手をし、お互いの名前を呼び合う。
こうして、俺達は、友達になった。
恋人ではなく、友達に。

「……………」

「やっほ、結」

あの後、家に帰るために、一人で校門まで出たところで（麻乃ちゃんの家が裏門から帰った）、校門の傍に佇む木の傍にいたらしい伊奈が、明るい声を出して、駆け寄ってくる。その服装は、体育着のままだ。

何だ、こいつまだいたのか。俺が、無言で、左右、前方ある道の中から、一本道の、前方の、今は咲いていないが桜の木が左右一面に生えている道を、歩き出すと、伊奈もとことんついてくる。犬みてー。

やがて、歩き出してから何分か経った頃に、伊奈が何故か恐る恐る（なんでやねん）こちらを伺いながら言った。

「麻乃ちゃんからの告白……どうした？」

「あー……断ったよ。まあ、今の所はとりあえず友達で、って感じで」

「……そっかつ。ま、そだよなー、結、ヘタレだから基本的にそういう距離を望むもんね」

「ヘタレとか言うな、泣いちゃうぞこの野郎。いいのか？ 俺を泣かせたらとんでもないぞ。てか男の涙はきもいぞ？ トラウマにするぞ？ 今なら遅くない。前言撤回しろ。つかしてください。割と

ヘタレって言われると心になんりクルんですよ」

「あははー。撤回なんてやーだよっ」

コノヤロウ……。ヘタレとか言うなよお！ 本当よ、俺面倒くさい男だから、そういうのかかなりダメーじ来るんだよお！ もういいし。泣いてやるし。……心の中で。

そんな事を考えていると、急に歩幅を合わせて歩いていた伊奈が、突然前に立った。なんだ？ ここを通りたいなら俺を殺していけ的な遊びか。まあそんなくだらない事な訳がないとは思うがね。

「結」

「あ、何？」

やがて、伊奈は最高の笑顔で、俺に、言った。

「ありがとうね」

「？ お、おう。……どういたしまして」

何だかよく分からないけど、そう答えるのが正解だった気がしたから、俺は、そう答えた。

その日の夜。月の綺麗な夜。
そこに。

カッ

綺麗で、それでいて莫大な光が、音と共に、広がる。

夜といえど、莫大な光と音で、誰かが騒いでもおかしくはないのに、誰もがそれを見えていないかのように、騒ぎなど一つとして起こらなかった。

そして、光が消えた、その場所に、異様な少女がいた。赤い長髪のスタイルの良い少女。しかし、それに不釣り合いな、白い、胸からふとももの辺りまで包まれた布の衣服をまとっている。強気な赤い目が、街を見回し、少女は、口を開く。

「思ったより、早く降界できたわね」

『はい。メニサ様が、全力で術式を構築した結果、想像以上の早さで降界門を開く事に成功しました。ただ、早い分、いささか不具合があるかもしれないとメニサ様が言っておられました。調子はいかがでしょうか？』

独り言のような声に、反応があった。

それは、耳から通ってくる音ではなく、脳に直接響いてくる男の声。その声に、少女は、軽く腕を振ってから、言った。

「ま……あるとすれば、流石にまだ完全には天使としての力が移ってないみたい。少し、体が鈍ってるような……そんな感じがするわ。大方、全体の8割ってどこかしら」

『そうですか。まあそれならいずれ時間が経てば解決できる事でしょう。他に、問題点はないでしょうか？』

「そうね、大丈夫よ。これなら、”ミスローフを連れ帰るのにも心配は無さそう”」

『そうですか。それは良かったです。万が一、問題があればいつでも言ってくださいね』

「ふん、誰に言ってるの天使、クエサ^{ヘラネツセ}H^{ヘラネツセ}ドウーネ。大丈夫よ。

問題はない。それじゃ、切るわよ」

『はい。それでは、ミスローフ様を頼みます。『大天使』、スフ

イカ^{ヴェリカ}V^{ヴェリカ}サンセットさん』

会話は途切れ、女は街をもう一度見回し、夜風に赤い髪と、白い布をはためかせながら、言った。

「さて、一体あんたはどこにいるのかな。ミスローフ^{スフイーナ}S^{スフイーナ}ウイリマ」

第七話 普通じゃない展開

「えー今日は転校生を紹介します」

麻乃ちゃんと友達になったあの日から二日経ち、今日は、月曜日。勉強の始まりとも言える、最も憂鬱な日。

そんな月曜の朝、何の特徴もない、我が2年B組の男の担任、通称名無し先生（名前すら覚えてない）が、のんきそうな顔で、教壇に立ちながら、言った。

その一言で、クラス中が騒がしくなる。転校生ねえ。そりゃ、普通なら俺も喜ぶんだろが……。転校生って言ってもどうせあいつだし、なあ……。

俺が、朝の憂鬱さに頭をしかめていると、右隣の伊奈が、こっちに顔を向けて、わくわくしたような顔で話しかけてきた。

「転校生、どんな人なんだろうね」

「あー」

「女の子かなー。男の子かなー」

「あー」

「誕生日いつかなー」

「あー」

「部活、どこか入るのかなあ」

「あー」

「名前、なんて言うんだろうね」

「あー」

「ん？ あんちゃん？ 兄^{あん}ちゃん？ へえ、結って双子のお兄さん
いたんだー」

「あー……って無理やり会話を続行してんじゃねえよ。あんちゃん
とか誰だよ？ 俺にはちよつとアレな妹一人しかいないからな」

「おー。やっと反応したした。反応しないから悪いんだよ」

とか何とかほざいてる伊奈は、俺で遊んだ事で楽しんだのか、飽きたのか、右隣の子に、話しかけ始めたので、俺は再びぼーっとし始める。

あー……。いいね。窓際の一番後ろだから、開け放たれた窓から、太陽の光が差し込んできて、非情に温^{ぬく}い。ぼっかぼっかー。

あーいいねこれ。気持ちいい。

なんか、汚いところがあらわれていくような気がするよ。ぬくぬくしゅわーって感じで。

抜く抜くしゅわーじゃなくってね。

「珍しいねえ結。転校生と聞いたら、一番喜びそうなのに」

ぬくぬくしゅわーってなってる俺に、前の席に腰掛ける、通称、男

の娘であり、自称どう見てもイケメンな男であり、俺称、俺の嫁の、空瀬春嫁が、こっちに椅子を傾けて、その水色の髪を揺らしながら、俺に言ってきた。

「あー。そりゃ、なあ……」

「？」

転校生、誰か知ってるし。

確証はないけど、100%、あいつだろう。

あの、天界に飽きて、普通求めてやってきた、墮落天使。
それは勿論、あいつ。

最近、心なしが全然出番がなかったような気がする、あいつである。

「入ってください」

「はい」

名無し先生の声に、廊下から応じ、一人の少女が入ってきた。

それは、真っ白な肌に、白銀の髪、そして明るい黄色の瞳を持つ、少女。

まあ、普通にミイである。天海堂学園の制服を着ている。

その姿を目に捉え、クラス中の男子、女子が、皆大きい声は出さな
いにしても、明らかに目を奪われていた。

……まあ、見た目はまさに天使だからなあ。無理もない。

伊奈と、春嫁も例外でなく、二人共、天使に目を奪われている。

やがてミイは、俺達に背を向け、黒板に向き直り、チョークを持って書き込んでいく。

そして、書き終わりに、再び俺達の方に体を向る。

黒板には。

ミイスローフⅡ楽門Ⅱウイリマ

「ミイスローフⅡ楽門Ⅱウイリマです。よろしくお願いします!」

「待てやコラ」

俺は席を立って、言った。

何ふざけた事書いてんだあの馬鹿。

真ん中はSスライナだろうが。

何Rラクカドにしちゃってんだ馬鹿野郎。

クラスメイトの視線が半端ないだろうが。皆騒いでるじゃないか。名無し先生超オロオロしてんじゃないか。

春嫁に至っては、隠し子? なんて聞いてくるし。うん、お前も待てやコラ。

「あ、お兄ちゃんじゃん。やつほ」

「もっと待てやコラ。何お前、双子の妹設定とかマジ何それ。マジ、ボケるなマジで。挨拶やり直せ本当に」

俺に妹はもう一人で十分だったの。超普通じゃなくて、けど愛らしい陽以外に俺の妹はいらない。

あ、いや、俺別に全然シスコンじゃないけどね？　ただ妹は一人でもいいっていうだけだからね。本当に。いやマジで。つかさっきからマジで多くない？　え？　多い？　マジでか。

「はいはい。ノリ悪いなあー。それじゃあ改めまして」

俺の抗議を適当に流し、ミイはもう一度黒板に向き直り、楽門の所を消して、スライナSに変えて、再び正面を向き、言った。

「はい。改めまして、天か……外国から来ました、ミイスローフスライナSⅡウィリマです。これから、よろしく願います。ミイスローフが名前ですが、どうぞ名前で呼んで下さい」

今度こそ、真面目にして、頭を下げるミイ。それに、笑顔でクラスの皆は拍手をする。勿論、俺も。

こうして、ミイの転校初日の、普通の挨拶（多少、ボケがあったが）は無事に終わった。

「それじゃ、ミイスローフさんの席は、楽門君の後ろだ。空きがなくて、窓際の一番後ろの更に後ろだけど……問題はないかな？」

「はい、先生」

ああ、だから俺の後ろになんか席があったのか。空きスペースなくて、後ろの掃除用具入れに手が簡単に届くぐらいの位置に、机が置いてある。

ミイは、とことこと、礼儀正しい足並みで、席へと歩いてきて――
――。

「あ」

何かを思い出したかのように、立ち止まった。そして、もう一度黒板の前に立ち、はっきりした声で、言った。

「自己紹介追記です。私は、楽門結君と同棲しています。よろしくね」

修正。無事に終わりはしなかったでござす。

転校生っていうのは、少なからずとも、普通は転校初日に、質問攻めになる。

これは二次元だけの話でなく、現実でも普通にある。

人間というのは、新しい物（まあ人だが）には目がない。
慣れて、学校に飽きてきてしまった人間が、新しい環境から来た新しい人に、飽きを紛らわせるために、多数の質問を飛ばすもの。

それなのに。

「ねーねー！　　楽門君って本当にミスローフさんと同棲してるの！？」

「何で何で？　　将来を約束した仲とかそういう感じなの？」

「何それ素敵ー。　　超ラッキーじゃん、楽門。あんなに可愛い子と

将来結婚できるなんて」

「……何で俺が質問攻めされてんだアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

俺は座っていた自分の席の周りを見回して、シャウトした。

周りには、クラスの女子！ 女子！ 女子！ やっほう！ ハーレムだあ！ あ、男子もいるけどそれはどうでもいいです（春嫁以外）。

ってそうじゃねえ！ 畜生、やっぱりさっきのミイの発言で、主にこういう話題が大好きな女子が俺に質問を浴びせてきやがる！

元凶たる馬鹿天使は俺の横でにこにこマイペースに笑ってやがる。

あっは、殴りてえ！

「つか何で俺に聞く訳！？ 普通はここで転校生に質問浴びせて仲良くなってく感じだろうが！」

「わかってないなあ、楽門。これはミスローフさんと接点があるお前の話をダシにして、仲良くなっていくという恥ずかしがりやな私達なりの仲良くなる方法だよ。まあそんなのはどうでもいいや、んでんで？ 結婚いつなん？ 法律的には16歳からOKらしいよ？」

「どうでもいいやって言った時点でそんな考えは微塵もないよなあ速水さん！？」
はやみ
つか、ミイも何か言えよ！ 否定する所があんだろ！？」

「まあ、殆ど夫婦みたいなものだよね、私達……。」

『楽門デメエエエ!!』

「うおっ!?　ちょ、まつ……ミイイイイイてめえ許さねエエエぞオオオオオオオオ!!」

頬を赤く染めて言う、演技が無駄に上手いミイに、クラスの青春亡彼女き者共が、俺に襲い掛かってくる。

あ、春嫁は彼氏……じゃなくて彼女いないけど、俺に襲いかかって来ない。流石俺の嫁!　愛してるぜコノヤロー!

そんな襲われる俺を尻目に、女子達と、一部の彼女持ちの男子は、話を進めていく。

まあ勿論絶賛襲われ中な俺にはそんな話は聞いてられない訳で。

え?　割と余裕そうじゃないかって?　あーまあ、人外力(人間以上天使未満の力じゃ長いんで人を外れた力、略して人外力にしました。厨二とか言ったら泣くよ)使ってるからな。

何百何千と押しかかろうと、屁でもないのだ。えっへん。しかし、男共の体臭やら、暑苦しさのせいで死にそうなのは秘密だ。

「あーっ!　ウゼエエエエ!!」

《空瀬春嫁SIDE》

「あらあら……。ざまあ……。じゃなくて、可哀想に、結」

彼女いない男連中（まあ僕も彼女いないけど）に、結が全力で襲い掛かられる姿を見て、僕は心底ほくそ笑む……。じゃなかった。

僕は心底心を痛めて、目を閉じて、両手を口元に当て、悲しみの表現をする。

決して笑っている訳ではないよ？

決して、あんな可愛い娘と知り合いなんてムカツクなどか思っ
てないけどね。

強いて言えば、死ねばいいのにーという言葉^{スワイナ}を結に浴びせたいとは思
ってるけど。

「それにしても……。いつからあんな可愛い娘とお知り合いになっ
たんだろうおね」

悲しみを表した体勢を解き、視線を転校生の……。ミスローフⅡS
Ⅱウイリマさんだったっけ？

長いな。ミリマさんでいいか。ファミマみたいだなあと思った。ま、
どでもいいか。

にしても最近、結って女の子の好感度上げすぎじゃないかな？
いやね、だって今日さあ、朝、伊奈と登校中に少し結の話をしたん
だよ。

そしたらさ、一々、結の事話すたび、明らかに反応が違うんだよね、
今までと。

なんかね、話すたび、すごい楽しそうなの。今まで以上に。そんなで頬とか少し染めちゃったりもしてさ。……死ねばいいのにー。一体何があったんだか。

まあ別に？ 伊奈が結の事好きになっても？ ミリマさんが結の家で同棲してようが僕には殆ど関係ないけど？

……っていうかこれじゃあ、何か僕が結のモテっぷりに嫉妬しているか……結が好きだから嫉妬してるみたいになっちゃってない？ いや、ないないない。僕はノーマル。僕はノーマルだ。

ま、話戻そか。

とりあえずまあ、最近結はもてすぎてて死ねばいいのにーって感じなんだよ。例えば今。

以下、ミリマさんと伊奈さんのお話を聞けば、僕の気持ちが分かるでしょう。

「ミイちゃんって、ゆ、結とどんな関係なの？」

「ん？ どんな、かあ……そいえば、そういう設定は確かに作っておいた方がいいかもね……」

「設定？」

「やー、なんでもないよー。そうだね、しいて言えば……相棒？」

「ぽ、恋人！？」

「や、違う違う。恋人と書いてパートナーじゃないから。相棒と書いてパートナーだよ」

「あ、な、なんだそういう意味だったんだ……ほっ」

「ほっ？」

「い、いや、なんでもないよっ!？」

とまあ、こんな感じな訳。

ていうか、まさか口で本当に「ほっ」とか言うなんて、流石は伊奈
というか何というか。

いやあ、それにしても。

未だに男共に襲われてる結を皆がら、心の底からいい笑顔で、僕は
言った。

「……死ねばいいのにー」

《楽門結SIDE》

「はぁ……」

放課後。体育館裏のベンチにて、俺はため息をつき、腰掛ける。
未だにミィの件で追ってくる奴等から逃げてきたのだ。

畜生、あいつらめ。

しつこい男とストーリーカーは嫌われるって何度言ったら分かるんだよ。

「あー嫌だ嫌だ。しかもミイに至っては伊奈と春嫁とどっか行っちゃうし」

何か、町案内だとかなんだとからしい。

俺は勿論追いかけてるので無理。

……別に泣いてなんかいないもん。俺も皆と出かけたかったなんてそんなに思っていないもん。

「ぐすっ」

これも全部あいつら青春亡き者共のせいだ。

いっそのこと人外力全開で使って地面に体埋めたらうか。

そんな事を考えながら、ベンチに座っていると、少し離れたところから、声が聴こえたので、そちらを向いてみる。
そこには。

「あ、あの野郎ッ……!」

あの小崎とその他のクソ共が、赤い長髪の女の子を、囲んでいた。
あいつらまた性懲りもなく!

俺は、奴等のところまで軽く小走りで近づいて――――

シュバァァァァァンッ!!

「な……っんだ……!??」

距離にして後50mの瞬間、激しい轟音が鳴り響く。
轟音と共に、とてつもなく莫大な、薄い赤色の光が、横薙ぎに振る

われ、小崎達の体は一瞬で遠い空へと飛ばされていく。

佇むのは、一人の少女。

遠くから見たただけだと、赤い長髪の少女ということぐらいしか分かっていなかったが、相応に異様な風貌をしていた。

美しく赤い気品のある髪と瞳。そして、白い、ミイと同じような、布で体を包んで――――。

「!? まさかっ!?!」

ミイと同じような。

それは、もしかして……!

俺の声に気づいたのか、少女は目線をこちらに向ける。そして、言った。

「楽門結ね。とりあえずまあ――――」

少女は、そう区切り、言葉を紡ぐ。

「一回死んでおきなさい」

シュバアアアアアアンツ!!

少女が軽く右腕を振った瞬間。

さっきと同じ、薄く赤い莫大過ぎる光が横薙ぎに俺目掛けて襲い掛かってくる。

何だよ一体!!?!

俺は、素早く避け、そして、大音量で言った。

「…………超展開キタ——！！」

第八話 普通じゃない選択（前書き）

4ヶ月もサボッてしまった・・・^^；
これから更新はやめにしていきますW

第八話 普通じゃない選択

「ふん……。あれを避けれるって事は、予想通りただの人間ではないみたいね。さっき私にしつこく声をかけてきた連中とは全然違う」

「……」

ビビった。相当にビビった。

あんな軽い動作で、あんな馬鹿でかい光が右から一気に襲い掛かってきたんだ。

いや、これはまあビビるような普通？ 別に俺が怖がりとかいうんじゃないくてさ。

つうか小崎達天使口説いて潰されたのか？

ざまあ（笑）

それにしても、何なんだあいつは。

……未だに体の右半身から、赤い莫大な光が轟々と蠢いていてすごい怖い。

というか、この世界にあんなもんが存在できていることが怖い。

「……何なんだ、お前は」

「今ので大体の予想、いえもう確信してるでしょう？」

「……天使か。ミィを連れ帰しに来たって感じですかね」

「正解。ミィスローフを、この世界に長く居させる訳にはいかない。ああ……それと」

「?」

彼女は、そう言って再び右腕を軽く振り――

ズシャアアアアアアンツ!!!

「……っ!？」

赤い莫大な光が、俺の横を、かすめた。
体育館が、一瞬で粉々になる。

おいおいおい。待て待て待て。死ぬって。

彼女は、僅かに苛立たしげな顔を見せ、言った。

「私は、『大天使』よ。そこは間違わないでもらえるかしら？」

「っ……。大天使だか何だか知らないが、人間界の建造物を破壊してんじゃねーよ。訴えるぞこら。てかお前こんな目立つことしたらどうなるか分かってんだろな」

「ふん、そんなのは後でいくらでも直せる。それに……気づいていないの？ この世界には、もう私とあなたしかいない」

「!？」

周りを見渡す。

誰も、いなかった。

下校をしようとしている生徒も、壊れた体育館に目を向けたり、驚く人もいなかった。

これは……。

「ミィの、能力ちからの……!」

「『穢れ無き空間』。使用者が指定した存在以外は一切入れなくなる空間。この空間はこの世界であって一時的にこの世界ではない。まあ、理屈を考えるのは無駄だから深くは考えない方がいいわ」

「……二人でいちゃいちゃでもしてくれる感じかい」

「そうね。まあ、激しすぎるかもしれないから、少しは覚悟してね」

ズシャアアアアアアアアアアアンツ!!

「待て待て待て! ボケへの突っ込みのレベルが強すぎる!」

再び莫大な閃光が襲ってきたので、俺は素早く避ける。

あつぶねえ。もう少し反応遅れてたら、完璧に体行ってたなありや。いや、逝ってたのが正しいですね。

「ふん、人間を越えた程度とはいえ、避けるなんて。褒めてあげる。けど、もうお終い。あんたを殺して、ミィスローフは連れ戻す。この、『大天使』スフィカⅡVⅡサンセットが」

「……スフィカっ!? お前、もしかしてミィの親友っていう——
——」

ズシャアアアアアアアアアアンツ!!

「う、おおおおおおおおおおお!?」

ああああああああああ、あぶねええええええええ！
喋りかけてる間に普通襲うか！？

「くっそ……！ やるしかねえ感じかよ。全く、超展開過ぎて笑えないぞ畜生！」

俺は、ダッシュでスフィカの元へ走る。人間の速度を越えたそれは、普通の人間なら、視認する事すら出来ないレベルだ。
けど、どうせスフィカみてえな天使……しかも、大天使とか言ってたな。

普通に視認されるんだろうが、そんなの関係ねえ！
だってなあ。

「閉鎖空間に閉じ込められちゃ戦う以外ねえからだよおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！」

俺は、叫ぶ。
ていうかもうやけっぱちなのであった。

スフィカはやはり普通に俺の動きが見えるようで、俺にしっかり視線を合わせている。

そして、目線を離さずに、相変らずの気品ある目を、鋭くして、右手を軽く上から下へ振って言った。

「『右閃』」

その瞬間、さっきのおよそ縦横100mなんて軽く越してる莫大な赤い光が、今度は上から降ってくる。

もう一度言おう。

縦横100mなんて軽く越してる馬鹿みたいに莫大な光が、上から降ってきたのである。

つまり。

避けられる訳が無え！

さっきのは右から来たから上に何mか跳べば回避できたが、今回の上から。

つまり、横に逃げても、その圧倒的な範囲では、一瞬でやられる。

かといって、アレを正面から抑えるなんてしたら、下手すりゃ消し飛ぶ可能性がある。

小崎達がやられてたときは加減してただけかもしれないし。ていうか下手しなくても消し飛ぶだらあれ！

「畜生！ 一か罰か！ 萌え……ゲフンゲフンッ！ 燃えろおおおおおおおおおおおおおお！ 俺の中の何かそう……情熱的なものおおおおおおおおおおおおおおおおおお！？」

俺は、そう叫んで、迫り来る赤く莫大な光に、向けて両手をかざす。

ズガガガガガガガガガガガガッ！！！！

受け止める。

「うッおオオオおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおお!!!」

「!?!? 人間を少し越えた程度で、なんで私の『右閃』を止められ
る……!?!?」

痛え! 超痛い! 両手が消し飛ばないのが理解できねえレベルだ
! 骨がっ骨がみしみしとおおおおおおおおおお。
にしてもこれはどうすればいいんですかね本当に! このまま力で
押されたらお終いだぞ!

そう考えた瞬間。

シュンッ

「……え?」

突然、スフィカの『右閃』とやらが消滅した。
な、何なんだ……?

「来たわね……ミイスローフ」

スフィカが、俺の後ろに目線をやりながら、静かに言った。
俺もつられて後ろを見ると、そこには制服姿のミイの姿が、あった。

「み、ミイ……ッ!?!?」

「うん、ミイだよ。大丈夫? 怪我は無いかな? 結」

「あ、ああ……。でもお前、どうして此处に……」

確か、伊奈たちと今は街案内に行っているはずだったのに。

「うん、まあ途中までは行ってたんだけどね。なんか、天界の強い臭いがここで感じられたから、来たんだよ」

「あっさり言ってくれるわね」

「……スフィカ」

スフィカが話に割り込んできて、ミイとの間に何ともいえない空気が漂う。

「つかこの空気何？ もう別のお話じゃね？ いつからこんなシリアスな空気になったんだ。」

「『大天使』の特有で強大な力を感じ取るのは難しい事じゃない。だから、ここまで来れたのは驚きはしない。けど、普通の天使が扱うレベルの『穢れ無き空間』でさえ、指定した存在以外が割り込むのは難しいのに、それを『大天使』の『穢れ無き空間』にこうもあつさりやれてしまうなんて、並大抵の事じゃない。こっちに来ても全く衰えていないのね」

「すみません、とても真面目な雰囲気でお話してるとこ悪いんですが結君全くお話についていきません。」

もう、頭ポカーン通り越してポキヤーンです。

そんな俺の心境を無視するように、ミイもまたいつもとは違う、真面目な雰囲気です。

「そんなに難しい事じゃないよ。『守』を象徴としたウォーネの完

壁な『汚れ無き空間』と違って、『力』を象徴とするスフィカの『穢れ無き空間』は大きく莫大だけど、その分、不安定な部分もある。その不安定な部分を私は突いただけだよ」

「なるほどね」

あの、ごめ、全然話の意味理解不能なんですが。

え、何これ。何か俺だけ一人置いてけぼりなんですけど。

要するに、スフィカさんスゲー、けどスフィカさんの穢れ無き空間っての破ったミイ超スゲーってことでOK？

とまあ、そんなくだらねえ事考えてる場合じゃねえか
今はそれより大事なことがある。

「……話に割り込んで悪いけど、スフィカって言ったよなお前。確かミイの親友だとか聞いたが、何の用だ？ いきなり殺します宣言されても頭がついていけねえ訳よ」

スフィカは俺のとても常識的な質問に、とても馬鹿にしたような声音と表情で言った。

え、何それむかつく。

「ふん、愚かな質問……愚問ね。まあ天界の事を知る訳がない人間だから仕方ないと言えば仕方ないわね。私はミイスローフを天界に連れ戻すために来た。そこから、貴方を殺すに至る理由……ミイスローフなら分かるんじゃないかしら？」

「……………」

スフィカの言葉に、ミイが表情を僅かに曇らせ、黙る。

その様子を一瞥し、スフィカは、再び口を開く。

「わかってるみたいね。そう、問題はミイスローフが貴方を一度殺したあの時から。ミイスローフが下界に降りただけでも大変な問題……大問題なのに、あろうことか、人間に接触し天界の存在を明らかにし、その上、人間の魂を改ざんするなんて事は天界の規則^{ルール}に背く。つまり……」

そこで言葉を一度区切り、瞳を一層鋭くし、言った。

「天界の事を知った貴方を一度殺し再び魂の改ざんをして、普通の人間に戻し、天界に関する記憶を全て消し、ミイスローフを連れ帰る。それが私の目的。まあ、記憶の方は貴方に限らず天界の事を知った全ての人間のものを消させてもらうけど」

成る程な……。

まあ、ある程度理屈は分かった。けど。

「何でお前がそんな事をするんだ？」

「……今話を聞いてなかったの？　それが、天界の規則^{ルール}だからに決まって——」

「そうじゃない」

「？」

「そうじゃねえんだ。お前は、確かミイと同じで下界……まあ俺達

の世界に來たがってたんだろ？ それなのに、なんでミイの邪魔をするんだ？　なんで、ミイを連れ帰ろうとする。天界の規則ルールなんて俺はんもん全く知らねえ。けど、お前も來たがってたなら一緒にいればいいじゃねえか。何でミイを連れ帰ろうとするんだ」

そうだ。

天界の規則ルール何てモンは俺は全く知らない。

だから、天界の人間から見れば俺はとてつもなく馬鹿な事を言っているのかもしれない。

けど、友達なら、お互いこの世界に行くことを誓っていた二人なら、規則ルールだの何だの、それ以前に優先するべき事がある筈だ。

俺のその思いに、問いに、スフィカは、一瞬齒を食いしぼる。

しかし、それも一瞬。スフィカは、すぐに表情を戻し、はっきりとした声音で言った。

「答えは変わらないわ」

答えは変わらない。それはつまり。

天界の普通ルールだから————

「オーケエ……」

成るほどね、規則ルールねえ。普通ルール……。

はは、成るほど……。

「くだらねえ」

「……なんですって」

「結……?」

声音を強くして、鋭い目で睨み言う俺を見て、ミイとスフィカがそれぞれの反応を見せる。

俺は、それを気にせずに、続けて、言った。

「ならいっちょ、普通^{ルール}を無視ってみますかアッ!」

ダダッ!

俺はそう叫び、スフィカへと走っていく。

「何をっ……」

「結っ!?!」

「青春バトルだッ! 俺が勝ったらミスローフ^{スフィーナ}||S||ウイリマは連れ帰らないでもらうぜ!」

「ふんっ……! 馬鹿ね。いいわ、受けて立つ。『大天使』を……舐めるなあっ!」

スフィカが叫び、右腕を思い切り振った。

瞬間、薄く赤い、莫大な光が真上から襲ってくる!

さて……。

118

――

「うっせえ！」

「!？」

「資格？ 規則^{ルール}？ 知らねえよ俺にはそんな真面目腐った事なんざ！ 大事なのは、お前がどうしたいかだ！ お前が、此処に居たいのか、居たくないかだ！ 我俣だろうが理屈が通ってなからうが、自分の選びたいモンを選べよ！ そんな面倒くせえ事は、答えを選んでからでもいくらでも解決できる！」

俺は、叫ぶ。

力のままに、思いのたけを全て。

そして、俺の言葉を聞いて、ミイは戸惑っていた、今にも泣きそうな顔をやめて、しっかりとした、決意を持った表情をし、言った。

「私は……まだ、此処にいたいっ！ 我俣だけど、理屈が通って無くても、私は、此処にいたいっ!!」

シュンッ！

「なっ……!!」

瞬間、俺を苦しませ続けた赤い莫大な光が、一瞬にして消え去った。スフィカが、信じられないものを見るような目で、ミイを見据える。

「いい子だぜ、ミイ。お前の選んだ答え、突っ走っていいこうぜ！」

「……うんっ！」

「ミィ……スローフツ……！」

スフィカが、信じられないようなものを見るような目でミィを見続けたまま、搾り出すように声を放つ。

うお、なんて怖え顔してんだ。目がやヴあいやヴあい。

「いいわ……。貴方がその気なら、私も容赦は一切しない。……親友だからって、気は抜かない方がいいわ」

「うん……。わかってるよ」

二人が、強い意志を込めた目で見つめあう。
そして。

「はあああああああああああああああっ！」

スフィカが、咆哮を上げ、右腕を思い切り横なぎに振るう。

するとそれに、薄く赤い——いや、今度は、とても色が濃く、赤い、それでいてやはり莫大な光が、横から振るわれてきた。

「気をつけて、結！ スフィカは、『天使』より更に上の階級の一つであり、天界でも四人しかいない『大天使』の、『力』を司るミカエル！ そのスフィカの閃光の色が薄く赤い色から濃く赤い色になったって事は……」

ミィが喋りながら、上方30 m程ジャンプし、俺もそれを見習い、

避ける。

そして、俺達の下を素通りし、その莫大な濃く赤い閃光は。

ゴシャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
ッ！！！！

「んなっ……！？」

同じ世界でありながら、俺の住んでいるのとは違う世界の、町並みが、およそ俺の目で確認できる範囲すべてが、閃光に触れた瞬間、粉々に碎け散る。

「その力は……果てしない！」

「っ……マジかよ」

地面に着地しながら、壊された町並みを見る俺達。

冗談じゃねえ。あんな阿呆みたいなモン食らったら、100%死ぬ！

となると俺がとるべき行動は……！

「う、おオオオオオオオオオオオオ！ 逃げるぞミイツ！」

「ええええええええええええええええええええええええ！？ いきなり！？ でも……了解っ！」

瞬間、ミイが何やら聞き取れない呪文なんだか適当に言葉言ってるだけなんだかわからない事を呟く。
すると。

「うおっ!？」

瞬間、俺達の前に白い、扉ほどの大きさの光が形を成して現れる。
なんだこりゃ。

「っ! 『神は常に在るべき場所へ』……っ!？。この場から一旦
逃げるつもりねっ! させ、るかああああああああああああ
ああああああああっ!」

瞬間、赤く莫大な光———確か、『右閃』とか言ったか。
それが、俺達を光ごと打ち消そうと、襲い掛かってくる。

「! 不味いっ! 結、早くその光の中に入ってっ!」

「光にっ!？ よくわかんねーが、わかった! ってどっちだよ俺
え!」

なんて馬鹿やりながら、二人して光の中に飛び込む。
すると、

「うおっ!？ 何処だ此処っ?」

いきなり、光に入った瞬間全く知らない場所……正確には、辺り一
面草原ばかりの場所に俺達はいた。

「『神は常に在るべき場所へ』。この世界の何処にだろうと、あの
光を潜れば目的の場所へ行ける。此処はそうだね……北海道のとあ
る草原かな、スフィカの作り出した異空間の、だけどね」

「成る程な……。此処なら多少は落ち着いて作戦が立てられるって

訳か？」

「うん、この術は繊細で、使える人が限られていてね、繊細な術を苦手とする『力』の『大天使』のスフィカもその例に漏れず、使えない。とは言っても、此処はスフィカの創造した異空間。幾ら細かい術を苦手とするスフィカでも、私達の場所を特定するのは時間が掛かるか掛からないかはともかく、難しい事じゃない。だからそんなにゆっくり出来る訳じゃないよ」

「そうか、じゃあ早速作戦会議と行くか。まず、お前さっきアイツの光シュンツで消したよな？ あれ、何回も乱用できないか？」

「『神の拒絶』だね。あれはあらゆる力を消すことが出来るけど、その分結構体力持ってかれるんだよね。それに、この世界はスフィカが作り出したもの。ただでさえ強力なスフィカの『右閃』に、圧倒的な力が加わる。もしかしたら、『神の拒絶』ですら完全には打ち消せないかもしれない」

「……完全には打ち消せなくても、ある程度は消せるって訳な。…なら、何とかなるかもしれねーな。最後に、聞きたい。あいつに弱点か何かはねーのか？」

「弱点……と言えるかは分からないけど、一つだけ……あるよ」

「マジか！？ 教えてくれ！」

「うん、スフィカは、さっきも言った通り、天界で4人しかいない大天使で、強大な力を振るえる。けど……スフィカがああ強大な力を振るえるのは、あの右手だけなんだよ」

「右手……だけ？」

なんだそりゃ。

大天使とかつつー大層な奴なら、普通全体が強大な力を振るえそうなモンだが。

「大天使には、司る力に向きが関係していて、それに関係した部分だけが、強大な力を秘めているんだよ。スフィカの場合は、『力』を司り、方向は『右』を司っている。だから、スフィカは右腕でしか、あの強大な力は振るえないんだよ。あの右腕以外の部分は、他の天使と大差ないレベル」

俺の疑問を晴らすように、詳しく説明してくれるミィ。
よくは分からんが……要するに……。

「あいつのあのふざけた力は、右腕にしかないって事だから、右腕以外の部分を叩けば、俺でも勝てる可能性はあるって事か？」

「うん、そうとも言えるかもしれない」

「へえ、なら————」

「なら、勝てるっても？」

「!？」

声が聴こえた場所にあわてて顔を向けると、そこには、スフィカが立っていた。

「そんな!？　いくら何でも早すぎる！」

「舐めないで。此処は私の空間で私は大天使。それだけのこと」

「はっ……面白いわ」

「ゆ、結？」

確かに少し早すぎる。

けど、もう大丈夫だ。

策は、ある。

俺は、一度目を閉じ、そして開き、言う。

「さあ、青春バトルの決着をつけようじゃねえか！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0521r/>

普通な事を願う彼女と普通じゃない事を願う俺

2011年11月15日00時04分発行